

園長からのメッセージ

Message

園だより
2000年4月～2025年3月



子どもを育む人間浴

春の若葉は、自然のエネルギーを吸収して成長します

子どもは、人間の心の栄養を吸収して成長します

私たちが望む子どもの姿は、個人の能力が優れている「良い子」ではなく、仲間との関係を豊かに発展させる能力を持つ「素敵な子」です。そのためには人間を好きになり、仲間の良さを発見できて、人間関係の苦勞と喜びの中から生きる力を持てるようになることが大切です。

日光浴や森林浴のように大自然のエネルギーを吸収するのと同じように、人間からたくさんの豊かな栄養を吸収して、自分もまた豊かにしていく「人間浴」を楽しむ能力を育てることも、育ちには必要なことです。

(2000 年 4 月)

子どもの居場所

子どもが自分らしく生きていくためには

安心して心を置ける「居場所」が必要です

子どもが主体的に生きていくために何よりも大切なものは、心の中に「安心」、「自信」、「希望」を持っているということです。そしてそれが育つための「居場所」を保障してあげることが大切なのです。

子どもの居場所の 3 つの要素

- ・第 1 の要素は、「安心感」と「解放感」を感じられること。これは居心地の良い雰囲気をつくり出し、「心のよりどころ」となります。
- ・第 2 の要素は、「存在感」と「期待感」を持てる場にするということ。人との関わりの中で生きていることを実感できることです。すなわち「心のつながり」を実感できるということです。
- ・第 3 の要素は、生きていること、生活していること、活動していることへの「価値観」、「充実感」を噛みしめることができることです。それらは何よりも「心のはり」をもたらします。

私たちにできることは、子どもが大切にされ、認められているという絶対的な安心感に育まれながら、自信と希望を持って社会に出て行くためのお手伝いをする事だと思います。

(2000 年 5 月)

子どもと同じ世界にいる

花も虫も子どもたちにとってはお友だちです

自分と同じ世界に生きています

一緒に遊んでくれるものは

みんな心の大切な栄養になります

子どもたちと遊んでいると、
「先生たちは子どもらしいね」と言いました。

一瞬意味がわからず問い返すと、
「だって、わたしたちと一緒に遊んで子どもらしく遊んでいるからだよ」という言葉が返ってきました。
よほどうれしかったのでしょう、その瞳はキラキラと輝いていました。

子どもたちにとっては、自分と同じように遊んでくれる人は信頼できるお友だちなのでしょう。とても大切なことを教えられた気がしました。

(2000 年 6 月)

心の貯金

楽しく遊びを展開できる仲間
ゆっくり、穏やかに流れる時間
豊かにひろがる自然の空間
が心を育てる栄養素

素敵な人は、心の中にいっぱい貯金のある人なのだと思います。毎日出会う経験を蓄積し、豊かに育った結果、素敵な人になったのでしょう。

積極的に人と関わり、仲間づくりが上手な子どもは、さらに人を好きになり、自分がいろいろな人に生かされていると実感できると思います。つまり、「人としての基本は、人間関係づくりがちゃんとできること」ではないでしょうか。

子どもは言葉の命令だけでは育ちません。大人が人を好きになり、ゆとりのある気持ちで子どもを見つめ、周りの環境の豊かさに気づくことで、子どももまた真似をして育っていくのだと思います。

もしこんなふうに育ってほしいという願いがあれば、そのように大人が見本を見せてあげればいいのだと思います。

(2000年7月)

わがまま？

わがままは性格ではありません
意欲の表れです
それをコントロールする力を
育てればいいのです

スーパーに行くと、あれだけ約束したのにお菓子の前で、
「買ってー！」と大声でわめく。
「ダメだよ」と言っても絶対に言うことを聞かない。
「イヤだあー、買ってー！」

こうした言動の多くは「わがまま」ではなくて、基本的に意欲があっても、それをうまくコントロールする力が成長していないことによる子どもの自己主張の現れに過ぎないと思います。

そんなときは、親はそんなに甘くはないよという原則を貫く以外にはないと思います。ただし、強く叱ることは禁物です。叱らないで毅然と拒否をするのです。ここで一番大切なことは、おどおどせずに自信をもって接することです。その落ち着きと深い愛情が子どもの自我を育てるのだと思います。

(2000年8月)

子どもと生きることを楽しむ

子どもは神話的時間と
次元を超えた空間と
自由な想像力を持っているから
天性の詩人と呼ばれます

[4歳児クラスの出来事]

大きくなったら何になりたい？

「ぼくねー、100年生になるの！」

「えっ？100年生ってどうなるの？」と聞き返すと、

「先生よりもとっても大きいんだよ」とうれしそうに言いました。

この子は100年先まで広がる憧れの世界と大きな夢を心の中にもっているのでしょう。その思いを大切にしたいと保育士は思いました。

子どもと一緒に生きることを楽しむ方法は、しっかり受け止め、投げ返すという毎日の温かいコミュニケーションだと思います。子どもの宝石のような言葉にじっくりと耳を傾けてみると、子どもの住む世界が少し見えてくると思います。

(2000年9月)

子どものタイプに合わせて育てる

子育ての方法は特定のメソッドのように

ひとつではありません

子どものタイプを見つけて

その子にも最もふさわしい子育てをすることが大切です

私たちは、こう育ってほしいという目線で子どもの成長を考えたり、子どもはこういう存在だと固定観念をもって決めつけているものです。その結果、大人に従わせることばかりやっしまいがちです。

子どもの中にはそのように育てられると、自分を出せなくて心の深いところに欲求不満を蓄積してしまうことがあります。人間にはそれぞれにタイプがあります。そのタイプに応じた育て方をしなければ、その子のもっている可能性を十分に引き出してできません。

子育てとは、まず子どもがどのようなタイプなのか見つけ出すことから始まります。子どものちょっとした仕草や反応を観察し、タイプを見出し、その子に合った育て方をすることが子育ての本当の楽しみなのかかもしれません。

(2000年10月)

気持ちのふくらみを大切に

気持ちのふくらむときが、自我の芽生えるとき

そこから明日への期待が生まれ

その子らしく生きる力が育ちます

立ち会ってみませんか

幼い気持ちのふくらみに

子どもにとってうれしいのは「はげまし」です。「だいじょうぶ。できるよ。もう一度やっごらん」と、可能性を信じて応援されることがうれしいのです。子どもは自分のことを信じて疑わない大人の姿に勇気をもらいます。それが自尊心を育て、やる気の気持ちがふくらむのです。

子どもをはげます5つのメッセージがあります。

- ・わたしはあなたを信頼しています
- ・あなたはちゃんと取り組めると思います
- ・わたしはあなたの言葉を聴いています
- ・あなたは大事にされています
- ・あなたはわたしにとって大切な存在です

これらのメッセージを言葉や行動によって伝えることが大切です。

(2000年2月)

もうひとつのおうち

気持ちをいやしてくれる人
楽しく遊べるお友だち
ゆったり流れる時間
そんな空間をもつ
保育園はひとつの家族

保育園が大きなひとつの家族だとしたら、子どもたちはどんなに幸せなんだろうかと想像します。みんなが兄弟、姉妹で、大人はみんなお父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんです。いろんなことがあっても、家族だからすぐに仲直りできるし、みんなで困っている子を支えることだってできます。挑戦しようとする子を応援することもできます。そう考えると、やはり「保育園は大きな家族」でなければいけないと思います。

(2001 年 4 月)

ことばにあそぶ

ワンピースを着ていた3歳の女の子。
風が強い日、テラスでスカートをおさえながら、
「せんせいー、かぜがパンツをみるー」
としきりに言っていた。

こいのぼりが風に泳いでいるのを見ながら、
「そらを、とびたくなってきたー」

子どもたちの言葉は、光り輝く宝物です。ひとつとして見逃すことのできない素晴らしい内容をもっています。風に目がついていたり、周りの環境に素直に刺激される自由な想像力があります。

子どもたちが自分を好きになる基本は、それらの豊かな感受性を大人がすべて受け止めることから始まります。自分を好きでお友だちのことも好き、周りのいろんなことが好きと思える、心の器が大きな子に育つように、大人も楽しみながら見守る子育てをしてみませんか。

(2001 年 5 月)

子育ての宝の山

[曇り空のある日]
真っ黒い雨雲が空をおおっているのを見て
「うわぁー、そらがおこってるよお」
[空を見ていたら]
「あのくも、おいしそう」
「あのくもさぁー、なんか、おまんじゅうみたいだねえー」

子育てに必要なものは、私たちの周りにあふれています。問題は、それに大人が気づくかどうかです。その大切なものに気づかせてくれるのは、案外子どもの発見と言葉にあるのではないのでしょうか。

当たり前が存在する雲ひとつをとっても、子どもにはイメージをふくらませる材料になります。「そうだね」と応えてあげて、子どもとイメージを共有して遊ぶ心が人と人、人と自然との豊かな関係づくりにつながると思います。

(2001 年 6 月)

石とお話をする

「こんな石、いつまで持ってるの」

「だって、石がお話するんだもん」

母親と中学生の会話です。でも、もう小さい頃のように石が話をしてくれないことに気づいていました。

もう、話はしてくれないのだろうか。

大人になることはさみしいことだと中学生は思いました。

子どもの感性は成長と共に失われていくものではなく、周りの大人が壊してしまうものなのかもしれません。保育園の子どもたちは驚くほどの豊かな感性を持っています。石、雲、風、水などあらゆるものとお話ができます。子どもの感性を育てるのに必要なものは、子どもの心に触れることができる大人の想像力の豊かさです。

(2001年7月)

子育ての3悪

1. 言語主義＝子どもが見つかる前に教えてしまう。
2. 競争主義＝競争することを目的にして頑張らせる。
3. 賞罰主義＝ご褒美や罰が頑張る動機に利用されている。

子どもの思考力の発達を歪める子育ての3悪というものがあります。

1つは、言葉で獲得していく勉強＝言語主義です。安易に与えられた言葉はどんどん吸収されますが、その記憶はすぐに消えていきます。このように教えられた知識は消えるけど、子どもが自ら体験した学習は脳に残ります。つまり辞書記憶(意味記憶)と体験記憶(方法記憶)との関係なのです。努力して暗記した記憶はなかなか残らないけど、自分のエピソードの記憶はいつまでも憶えているという説明だとわかりやすいでしょうか。体験を通した感動が一番の栄養だということです。

2つ目は、競争を目的にして頑張らせる＝競争主義です。競争しなさいと教えたつもりはなくても、競争をおおっていることはよくあります。これは子どもの好奇心への動機を歪めてしまいます。

本来子ども自身は競争心をもっていますので、自発的に競争するのは一向に構いません。それどころか大事なことです。否定しないで、「頑張ってね」と支えてあげればいいのです。

3つ目は、「達成したら〇〇をあげる」という＝賞罰主義です。これもやはり動機を歪めてしまいます。ご褒美は結果に対して与えるものです。最初から約束するものではありません。この3つとも自発的な意欲を損なう要素です。安易に効率的に与えられた学習の喜びではなく、体験を伴った自ら獲得していく喜びを大切にしていきたいと思います。

(2001年8月)

こころを育む

いのちといのちが出会い

つながるとき関係が生まれ

こころの関わりあいの中から

子どものこころが育まれる

いま何を感じ、考えているのかなと、想像してくれるお母さん、お父さん、身近な人々がいてくれることで、子どものこころは育っていきます。赤ちゃんはお母さんの胸に抱かれると至福の表情で寝てしまいますが、そのときの無条件に守られ安心した状況の中で、いのちといのちがつながる体験をします。また

お母さんは赤ちゃんの思いを肌で感じるようになります。この積み重ねを繰り返すうちに、やがてお母さんを離れて外の世界を探索しはじめますが、少しでも不安になってくると戻ってきます。お母さんの膝の上が「安全の基地」になっていて、「いのちのエネルギーを補給」しているのです。

毎日、短時間でもいいから、「この子はいま何を思っているのかな」といろいろ想像しながら一緒にいる時間をもつことが、こころの育ちには必要なだと思います。

(2001 年 10 月)

ときめき

ときめきとは目が輝くこと

ときめきとはワクワク、ドキドキすること

子育てとは子どもと一緒に

ときめき続けること

ときめくときにはワクワク、ドキドキ、ルンルン、キラキラ、ソワソワします。そして目が輝いています。しかし年を重ねるごとに、ときめきの瞬間が少なくなってきたいませんか。ときめきが少なくなると表情も乏しくなり、時間の流れが短く感じるようになります。幼いときには一日の時間が長く感じたのに、年を重ねるごとに短く感じるのは、「心がときめかなくなった」というのが今や定説になっています。

ヒトやコトにときめくことはとても大切なことなのです。子どもたちの毎日はときめきの連続です。私たち大人も一緒になって同じ目線でときめくことが、感性を豊かに保ち続ける秘訣なのかもしれません。そしてそんな大人が身近にいと、子どもたちは幸せを感じながら育ちます。それが子育てであり、大人が老け込まない秘訣でもあるのです。

(2001 年 11 月)

響きあう心と心

日々の記憶の積み重ねが自分をつくる

心と心が響きあうとき

愛し愛された記憶となり

その記憶の積み重ねが

健やかに育つ大切な要素となります

多重人格症は複数の人格が脳に同居しています。実は多重人格症の多くが子ども時代の虐待の影響からきているといわれます。記憶とは一つのロープ状につながったものです。しかし虐待を受けた記憶は、消し去りたいと脳が判断し、記憶のつながりからはずされます。そのはずされた記憶がもう一つの人格となっていくのです。はずされた記憶が多いほど別の人格が生まれるといわれています。

このような例をみると、心と心が響き合い、愛し愛された記憶が積み重ねることが、健やかに育まれるということにつながります。

愛するとは、愛情を一方的に与えるということではなく、相手の気持ちも同時に汲み取るということです。そのようにして育った子どもは、人の気持ちがわかる子に育つでしょう。

(2001 年 12 月)

自分が好き

ずっと短所だと思っていた「まっすぐすぎるところ」を

私の良いところだと言ってくださったのは、園長先生が初めてでした。

すごくうれしくて、自分を少し好きになれました。（元職員からの手紙より）

子どもにとって大切なことは、「自分が好き」という自己肯定感です。すべての成長の原点です。もし欠点ばかりがある自分が嫌いだと思ってしまうと、それがつまづきの原点になるかもしれません。

子どもたちはもちろんのこと、私たち大人も「そのままの自分」を好きになる必要があります。好きになったら、その姿が子どもたちに映し込まれ、成長の栄養になるのかもしれません。

（2002 年 4 月）

子どもが伸びるとき

子どもに共感し、励まし、
安心感を与え、希望を語り、思いを支える
するとそこから自信というプライドが芽生えはじめる

子どものやることを上から目線で評価していませんか。この姿勢を続けると、親の評価ばかりを気にする子どもに育ってしまい、本来の素直な感情や主体的な欲求を表現できなくなってしまう。子どもにとって親は自分を愛してくれる最大の味方です。だから一生懸命親の気持ちに応えようと自分の気持ちを抑えるのです。例えばこんな言葉かけがあります。「おりこうさん」ではなく、「よかったね」という言葉です。ひとりの尊厳を持った人間として扱うということが大切なのです。

その結果、子どもは思いきり感情を表現し、主体的欲求を満たしながら活動しはじめます。そして自分に自信を持ちはじめます。これがプライドが芽生える瞬間で、この繰り返しのなかから、子どもは自分の力で伸びていくことを学んでいくのです。

（2002 年 5 月）

無条件に愛されること

誰かと比べられるのではなく
ただ自分自身でありさえすればいい
本当はそんなことが大切なかな

自分がいる。誰かがいる。みんな完全な人間ではないから支え合う楽しい自分がいる。
苦しい自分がいる。悲しい自分がいる。いろんな自分がいるから、誰かの気持ちもわかろうとする。
そんな自分自身を大切に思うことが大切なことで、人に対しても、無条件の愛をもつことができます。
子どもの心の源泉になるのは、すべてを包み込む無条件の愛なのです。

（2002 年 6 月）

夢を見るのは大好き

夢は歩いてきた人生の記憶の中から紡ぎ出される宝物
そして明日を歩く道しるべ

もし夢がなければどうやって、何に向かって進めばいいのでしょうか。夢は抱くものです。想像するものです。だから誰でも自由に描けるはずです。

大人が子どもを感情で強く拘束し、不安感を育て、その結果自己肯定感をもてない子どもに育ってしまふと、ときに夢をもてなくなる場合があります。

「夢はあなただけのものだから自由に想像してごらん」という言葉は魔法のおまじないです。このおまじないをいつももっている大人のことを子どもは大好きです。そうすると自由に自分の能力を羽ばたかせることができるようになります。

(2002 年 7 月)

はじめての好き

子どもはいろんなことを好きになって
世界を広げながら成長します
その好きのはじまりが お母さんやお父さん
いっぱい好きなだけ 子どもはいっぱい育ちます

子どもがはじめて好きになるのはお母さんです。お母さんのことをいっぱい好きになって、お父さんを好きになって、それから周りの人を好きになります。これが育ちの始まりです。だから「はじめての好き」という感情の密度は、育ちにとっても影響を与えます。

人間の脳には扁桃体と海馬というものがあります。扁桃体は好き嫌いを判断するところで、海馬は脳に記憶としての情報を入れるかどうか判断するところです。これは隣り合って位置していて、多くの連携をしています。つまり好きなものは脳に取り込むけれど、嫌いなものは取り入れないという関係をもっています。

「好きこそものの上手なれ」ということわざは科学的に正しいわけです。好きなものが多いほど脳に情報をいっぱい蓄積して、それらがネットワークをつくり、ますます好きなもの(好奇心)が増していくというように、際限なく脳は発達していきます。そのはじまりが「お母さん好き」なのです。

(2002 年 11 月)

おかあさんの世界一

世界一にならなくてもいいよ
クラス一にならなくてもいいよ
だって あなたは
おかあさんの世界一なんだから (TV 視聴者の言葉から)

なんと素敵な言葉なんでしょう。やさしく見守る愛情は強い心を育み、自らの行動で得た経験はやさしさを育みます。そしていつも気持ちに寄り添っていれば、安心して夢を無限にふくらませることができるのです。

そのためには親の愛情が、その時々で感情でゆるがないものであることが大切です。また子どもが存在するだけで、どれほど多くの幸せを与えてくれるでしょう。「あなたがいてくれることにありがとう」と心の中でつぶやくときが幸せの瞬間です。育児は特別なことではありません。大きな愛情があればいいのです。

「あなたはお母さんにとって世界一の宝物。だから、いつまでもあなたらしくいてね」

(2002 年 12 月)

やさしさ

子どものありのままのすべてを
受け止められたらもうだいじょうぶ
そこから子育てがはじまります

やさしい人は素敵です。すべてを笑顔で受け止めてくれる人のことを子どもは大好きです。いたずらをしたり、いろいろな言葉でおもしろがったり、子どもはいつも挑戦をしながら育ちます。そんなぜんぶをまずは受け止めてから、いろいろなことに気づかせることが大切です。子どもが投げた心のボールをよけたり、打ち返したりするのではなく、しっかりとキャッチしてあげることです。それを繰り返すうちに、子どもはやがて受け止めやすいボールを投げるようになります。

子どもにとってやさしさは、成長のための大切な栄養素です。常にやさしさを保つのは大人にとって大変だけど、自分の感情を少しだけおさえて、「ねばならない」という子育て論を横に置いてしまえば、案外できるのかもしれませんが。要は自分の気分で育てない。極端な子育て熱心になりすぎないということです。バランスをとりながら、少し肩の力を抜いて子どもに向き合ってみませんか。

(2003 年 1 月)

いつも新鮮な自分

生きること慣れないでください

慣れた瞬間から

つまらないものに見えてしまいます

慣れない子どものように

周りの世界の不思議にときめきましょう

脳の神経細胞は1秒に1個ずつ死んでいき、再生はしません。ところが海馬という部分だけは、新しい神経細胞を作り出すことができます。細胞は例外なく死んでいきますが、それよりも多くの新しい神経細胞を生み出せば、結果として増えるのです。いろんなことに積極的に取り組み、考えを決めつけないで、柔軟で無邪気であれば、大人でも海馬は新鮮であり続けるかもしれません。

海馬は記憶を受け持つ器官です。記憶は「意味記憶」と「方法記憶」に分類されます。意味記憶は暗記だと理解してください。一方、方法記憶は時系列の経験による記憶です。方法記憶＝子どもの遊びと理解してもいいでしょう。後者の方法記憶の蓄積から複雑な脳のネットワークが構築されれば、人間の脳は限りなく能力を発揮していくと思います。

(2003 年 2 月)

おとなのしごと

子どもの「好き」の世界を

いっぱい広げるお手伝いをすること

いっしょになって いろんなことを好きになること

そして幼い日々を思い出して

もう一度子どもの目で世界を見てみることに

子どもに寄り添い、一緒になっていろんなことを感じるのがおとなの仕事です。子育てとは、おとなの世界に近づくことではなく、じっくりと子どもの世界に付き合うことなのかもしれません。

自分の幼かった日々を思い出しながら、あのときの気持ちを思い出して味わってみることも大切です。「好きなこと」や「好きな人」に出会った幸せの瞬間を再体験してみましょう。

すると、いつもと少し違う自分に出会え、忘れていた子どもの住む世界と一緒に住むことができるかもしれません。そこでやっと子どもの思いを感じることができるのでしょうね。

子どもの「好きの世界」をいっぱい広げるお手伝いをすること、それが子育てだと思います。

(2003 年 3 月)

生きている

「何がなにやら みんな咲いている」(山頭火俳句より)

大地に素足で立つ
指の間に土がもぐりこむ
あたたかい感触が からだ全体にしみわたる
こんなに柔らかいのかとあらためて思う
ときには 存在の意味を問う必要もないときもある
自分の存在理由さえわからないのに 何をわかろうというのか
そこに身を置き 感じるだけでいい
作品の意味を問われたピカソは言った
「あなたは鳥のさえずりを理解しようとしませんか？」
何がなにやらみんな生きている
山頭火の俳句に触れて、そんなことを考えました。

(2003 年 4 月)

育ちは積み木と同じ

心と心の響き合いを大切にし
気持ちに寄り添い
新しい芽生えの一つひとつを
ていねいに積み上げる
そして じっと待つ

人は育てられたようにしか育ちません。何か育ちに問題があるとすれば、何かがおろそかにされてきた結果なのかもしれません。

育ちのプロセスの 3 大原則は、

- ①乳児期(0 歳)=基本的信頼関係をつくること(赤ちゃんが自分は愛されていると感じられること)
- ②幼児期(1~2 歳)=自律性を育てること(自分で自分をコントロールするためには、何回でも教え、できるようになるまでじっと待ってあげること)
- ③児童期(3~5 歳)=積極性や自主性を育てること(自分でやってみないとわからない年齢です。何でもやってみようとする気持ちを大切に、十分させてあげること)です。

そして問題があれば先に進まずに、前に戻って子育てをやり直すことが大切です。積み木と同じ一つひとつの積み重ねが育ちなのです。

(2003 年 5 月)

今が一番いいと思う

人はいろいろなことを経験して
多くのことに気づいていく
そして まだ見ぬ明日にときめく
大切なのは
今が一番いいと思い込むこと

人はいろいろな人生を歩いています。もう歩きたくないと思う日もあります。傷つき、座り込みたくなるときだってあります。悲しさも涙がとめどなく流れ落ちるときはまだいい、深い悲しみの底にあるときは涙さえ出てきません。

そんなときでも「今が一番いい」と思う。ちょっと無理しているけれどそうしてみる。

怒りや不満を人にぶつけても、鏡に向かう独り言と同じで、全部自分に返ってきます。

毎日「今が一番いい」と思うことで、新しい明日への扉が開きます。大人がそう思うことで、子どもたちの明日もうれしい日になります。

(2003年6月)

大人が子どもと一緒にいるときに 幸福を感じていれば 子どももまた幸福を感じている

子どもは大好きな人の微笑みに支えられて育ちます。大好きな人だからこそ、その人のすべてが気になります。好きな人が幸せなら、自分も幸せになれる。親と子はそんな関係なのかもしれません。

子どもと一緒にいるときに幸せを感じるということは、その子のすべてを信じて受け止めているということです。信じているから、じっくりと育つことを待つことができます。待つことができるから、余計な言葉かけをしなくて済みます。余計な言葉かけがないから、自律心（自分でコントロールする能力）が育ちます。

いつもあたたかい眼差しで見ている親の姿が、自分を肯定できる子どもを育てるのだと思います。

親と子が共に育ち合うということは、信じ合うことから始まるのです。

(2003年7月)

自分にはきっとできるんだと 信じること それが本当のプライド

いろいろな記憶の集積が今の自分です。その証拠に過去の出来事にこだわるのは、記憶が自分をかたち作っているという意識があるからなのでしょう。しかし過去は未来の自分を保障はしてはくれません。

どんな未来にも正面切って向かう意欲と、「自分はきっとできるんだ」と思うことが、自分を保障し支えることなのです。

プライドとは、自分を信じられることであり、ありのままの自分を受け入れ、未知の能力に向かって挑戦できることを言うのです。

「できない」ではなくて、「きっとできる」と思う姿を見せるのも、子育てのひとつです。大人の姿を映し出す鏡が子どもだから、その子どもの成長には大人の生きる姿が影響されます。愚痴ばかり言っていれば愚痴っぽい子どもになるし、怒ってばかりいれば怒りっぽい子どもになります。「どうせこの世は」などと思っていると夢も希望ももたない子どもに育ってしまいます。

人間にとって大切なものは、自分の可能性を信じられるプライドなのかもしれません。

(2003年8月)

子どもの遊びを一緒になっておもしろがる

子どもがおもしろがり、無心になって遊ぶ。その姿を大人もまたおもしろがって見守る。こんな関係があればいいと思います。遊びは大人の価値観をできるだけ持ち込まず、子どもが主体的に興味・関心を

もって集中して楽しむことではないでしょうか。また創意工夫をしながら遊びを展開していくことをおもしろがることだと思います。

遊びには、これから人間として生きていくための基本的な要素がいっぱい含まれています。だから子どものこれからの人生のシミュレーションであるとも言えます。

子どもにとっては一日の生活のすべてが遊びです。また幼児期は集中できる時間が短いためコロコロと気持ちが変わりますが、そんな子どもの発達過程を大人が気持ちのゆとりを持って、おもしろがり、見守ることが大切なのだと思います。

(2003 年 9 月)

いまを生きる

とまどい ぶつかりながら
自分らしく いまを全力で生きる
それが 子どもらしさなのかな

人間には2つの約束事があります。

1つ目は、必ずいつかは死ぬということ。

2つ目は、今という瞬間は二度と訪れないということ。

この2つだけは、人間みんな平等に約束されています。だから、生きるとは今のこの瞬間をしっかりと生きることです。後でじっくり味わって生きようとしても、今という時間は二度と訪れません。

子どもらしく生きるとは、今をその子らしく精一杯生きることです。それが十分に保障されない限り、豊かな未来に繋がらないでしょう。急いで小さな大人をつくるのではなく、その子らしさとは何だろうと考えながら、一緒に探し続けたいですね。

(2003 年 10 月)

こころ

こころが 満たされて
しあわせを感じる
こころとこころが 重なるとき
自分を好きになれる

人はひとりでは自分の本当の姿を見ることはできません。他の人を鏡にすることで自分を確認できます。うれしいことも、悩みごと聞いてくれる人がいるから満たされます。全部まるごと受け止めてくれて、余計な忠告などしなくて、ただやさしく受け止めてくれる人がいたら幸せだと思います。

そして「そうだよね」とうなずいてくれたら、自分のことを好きになれるような気がします。

人が人を非難しあったら、きっと不幸になるのに、人間はそんなことばかり繰り返します。本当は自分を嫌いな人が、他の人のことも嫌いになっていることに気づかないのです。

子どもたちには自分を好きになってほしいと思います。あるがままのすべてを丸ごと好きになって、他の人のことも好きになってほしいと思います。そしたらきっと幸せな人生が待っているような気がします。

(2003 年 11 月)

あなたに会えてよかった

未来を見ている つぶらなひとみ
明るく 無邪気な笑顔

やわらかい手
甘い匂い
そんなあなたのぜんぶが好き

あなたは幸せを運んでくれる私の宝物。かけがえのない夢を追い続ける翼をもった存在。切なくなるほど愛しいあなたに会えて本当によかった。

私にできることは限られているけれど、精一杯あなたの成長の土台になりたい。あなたのすべてを受け止めることはできるからそれでいいよね。心はいつも一緒にいるからね。あなたと私のこの瞬間を大切にしたいと思っているから、心も体も大きくなるまで、いつまでも待っているから、焦らなくていいんだよ。あなたのペースで一步ずつ確かめながら歩きなさい。

好きな人のことは ぜんぶ信じられるから、いつもあなたらしくいてほしい。
あなたに会えてほんとうによかった。

(2003 年 12 月)

子どもが本気になる

子どもの夢を大人も共有し
むじゃきにはしゃぎ
命令などしないで
いつも子どもの心のそばにだけ

世界的なヴァイオリニスト千住真理子、ニューヨークで活躍する画家千住博、TV のテーマ音楽などの作曲家千住明の 3 兄弟を育てた母親は、一体どんな子育てをしてきたのでしょうか。母親は、「私は子どもたちに指示したことはありません。ただ子どもたちの夢を本気で応援し、子ども以上にはしゃぎ、夜中に子どもが何かに打ち込んでいれば、私も台所で起きていました。それが私にできる応援でした」と語っています。

父親は部屋の壁に落書きをする長男を見て叱ったそうです。なぜなら父の姿を見て長男が落描きを止めたからです。「落描きが好きならどうして止めたんだ。本当に好きなら誰が何と言おうと描き続けろ」と言ったそうです。長男はそれから家中に落描きをして、やがて世界的な画家になりました。

両親が子どもたちに伝えたことはただひとつ、「我が家には趣味など存在しない。好きなことは本気でやりなさい」という態度でした。大人が子どもの夢に本気になれば、子どもも本気になれるのです。

(2003 年 1 月)

幸せとは信じてもらうこと

子どものありのままを全部受け止め
内に秘めた可能性を全部信じて
ただ子どもがいることに感謝するだけ
そんなありがたい気持ちが子どもを幸せにする

中国雑伎団で 6 歳の男の子が涙をこらえて練習していました。貧しい家に生まれ、満足に食べることもできないために、母親に連れられて民間の雑伎団にやってきたそうです。でも母親も子どももお互いに強く愛し合っていました。だからその子の表情に悲しさは感じられませんでした。

その子の夢はお嫁さんをもらうこと。家族で腹いっぱいご飯が食べられ、愛する人と一緒にいたいという願いには、強い現実感がありました。(NHK 特集より)

愛されているからどんな状況でも夢の可能性を信じられるのだと感じました。

同じ日、豊かな日本では両親による虐待が報じられていました。中学生を1年半あまり部屋に監禁し、食事もなく与えず餓死寸前で保護された事件です。存在を否定され、身の自由を奪われた絶叫のような苦痛と絶望感の中で、それでも少年はかすかに生き続けました。脳が障害をもつほど破壊されていても。

子どもにとって存在を否定されるほど悲しいことはありません。その逆に子どもが幸せを実感できるのは、「あなたがいてくれるだけで私は幸せ」と思ってくれる親の存在だと思います。

(2004年2月)

子どもの気持ち

子どもはあなたの言ったことを忘れるかもしれません

あなたがやったことも憶えていないかもしれません

しかし、あなたが子どもたちをどんな気持ちにさせてくれたかは

一生忘れないでしょう

(アメリカの詩人マヤ・アンジェローの言葉より)

モンゴルの大草原で遊牧生活をしている父親が語っていました。

「子どもに羊の放牧を教えているとき、私は遠く離れた場所からずっと見守っているだけです。一日の放牧が終わったとき、その日に気になったことを教えます。分からなければ話し合います。子どもは理解して初めて分かるのですから。決して殴ってはいけません。そんなことをしたら人の目をごまかして生きようになります」。

なんて豊かな心と理性をもった父親なのでしょう。

大空と大地の真ん中で生き、太陽と風と雨と草に生活のすべてを委ねて生きる。便利なものなど何もないからこそ、深く考える。育児書などない。必要なのは誠実に生きるということだけです。

(2004年3月)

幸せとは心が充たされること

人は誰でも心が充たされることを望んでいます

だから、空に舞い上がる風船みたいに

子どもの心を充たしてあげたい

これまで生きてきた記憶の積み重ねがその人そのもの。その記憶は経験が生み出すもの。外に向かって働きかけ自分をつくっていきます。だから子どもは年齢に応じて自分の活動範囲を広げ、経験を積み重ねていきます。そして世界に一つだけの心のかたちになっていきます。

子どもがまわりの風や雲や虫や水や草花などに関わることに幸せを感じているとすれば、その心の動きに気づかなければなりません。

子どもの幸せの瞬間に立ち会うこと、そして共感してみること、それが「寄り添う」ということです。自分とは違う心のかたちをしている子どもの存在を知り、大切な宝物として守り育てることが育児だと思います。

(2004年5月)

Waiting for you

子どもの存在をしっかりと見つめ

急いで育てず

信じて、待ってあげる

誰でもない自分を、ちゃんと見てくれる人を子どもは好きになります。
子どもは自分のペースで歩くことを許されたとき、安心して、内に秘める自分の花を咲かせます。
他の子と同じでなければならぬ理由はどこにもないはず。
その子だけの幸せのものさしを探すのが、大人の仕事です。
だから、大人の幸せのものさしで、子どもを見てはいけません。
ていねいに見ること、子育てとは子どもから学ぶこと、それが「親育ち」。
子どもが育つように、親も一緒に育ちます。
「自分の可能性の育ちにつきあってもらうこと」を、子どもはいつも望んでいます。

(2004 年 6 月)

子育ては、視覚障害ランナーに 伴走する人の役割に似ています

子ども自身が自分を信じ、持てる力を発揮できるように
働きかけることは教育の原点です。
そのためには、その子の力を信じなければできないことかもしれません。

視覚障害者のランナーに伴走する人は、つかず離れず、押しも引きもせず、その人が走りやすいように
歩調を合わせながら寄り添って走ります。

それと同じように子育てとは、親の思いで引っ張ったり押ししたりして指導するのではなく、子どもの思
いをよく聴いて、必要な情報は提供するなどして、そこから子ども自身が答えを見つけることを手伝って
いくことではないでしょうか。

子どもの思いを「聴く」ことと、「共感」することが子育てのはじまり。

「聴く」とは単に耳で聞くだけではなく、目でも心でも体でも聴く、つまり心を傾けて聴くということ
です。何を訴えようとしているのかじっと聴くことによって、見えてくるものがあります。子どもも聴い
てもらうことによって、思いが整理されていきます。

(2004 年 8 月)

親と子は海と空の関係

青い空と青い海
曇天と鉛色の海
海は空を映し出す鏡
人間は自然の一部だから
同じように、子もまた親を映す

子どもは模倣しながら学び、成長していく存在、不思議なくらい身近な親の姿を映し出します。それは
言葉や行動だけではなく、心や感情までもまねをしていきます。

だから子どもの発するサインは、時に親に対する警告信号である場合があります。子どもだけの問題と
して考えるのではなく、その原因が親にあるかもしれないと考えることも必要かもしれません。

子どもに対して成長してほしい姿があれば、その姿を親が示すことが一番の子育てです。口先だけの命
令ではけっして子どもは親の望む姿に育ちません。なぜなら、子どもは親を映し出す鏡なのですから。

(2004 年 9 月)

みんな好き

ひとが好き
あそびが好き
いろ、かたち、おと、かおり、あじが好き
自分の周りのことがぜんぶ好き
そんな自分がいちばん好き

「好き」の感情に出会うときが、いちばんうれしい瞬間です。

心がうきうきして、いろいろなことにかかわりたくなります。するとまた新しい「好き」との出会いがまっています。ひとやできごとにかかわることはとても大切なことです。そこからいろいろな感情や知恵を学びます。「好き」の感情は生きる原動力なのです。

「好き」の感情をもったとき、ひとは無防備になります。でもそれは心の窓を開け、受け入れる態勢ができたということです。

だから「子育てとは、子どもの好きの世界を広げるお手伝い」だと考えています。

(2004 年 10 月)

抱きしめる

わが子を抱きしめる
ちいさな体はもちろん
思いも、感情も
ぜんぶ抱きしめる
それがいちばんのプレゼント

小さなときの思い出はあまり残らないけれど、あたたかい胸の中やひざの上の安心感はいつまでも忘れません。

そして、それは人を信じる気持ちに変わっていきます。どんな人だって信じられる人が欲しはず。大人も子どもも、常に安心の居場所を求めて生きています。

子どもがいちばん欲しいのは、あたたかさやさしさと信じてもらえるという安心感。心の豊かな子どもに成長するためには、大人から豊かな心をいっぱいもらうことです。いろいろなことを教え込む前に、あたたかい感情を十分に味合わせるのが子育ての順序だと思います。

(2004 年 11 月)

感動の種

感動の種をいっぱい持っていて
いろいろなことに共感できる人は
すてきな人

感動できる人は、心のなかに「感動の種」を持っています。種のないところから感動は生まれません。感動の源は「感動の種」なのです。

では、どうやって「感動の種」は育つのでしょうか。人は経験したことのないことは、なかなか理解できません。経験したからこそ実感としてよくわかるのです。そのためには、乳幼児期という人生の一瞬にしか存在しない「子どもの世界」を生きているときに、十分に共感されて育つことです。感動は人の心と心が重なり合ったときに生まれます。だから、心に寄り添い、心を抱きしめることが必要なのです。みんな

と一緒に、子どもたちの「感動の種」を育ててみませんか。

(2004 年 12 月)

こころでみる

子どもが見える瞬間
体と心が向き合うだけ
それ以外何もない
そんなとき
子どもの本当の姿が
見えてくるのかもしれない

溢れる周りの情報や刺激に頼らないで、身近な人の体と心だけが向き合うとき、本当の会話が生まれるのではないのでしょうか。そんなとき、大人の目に子どもの本当の姿が見えてくるのかもしれない。

「あなたがいてくれてありがとう」という気持ちを伝えながら、家族の存在を実感してみませんか。

(2005 年 1 月)

子どもの土になる

子どもたちがそれぞれに
自分らしさを芽吹かせられるように
大人は豊かで温かい土でありたい

基本的に野菜は土しだいで育ちが左右されます。子どもも同じではないでしょうか。子どもが本来持っているものを最大限に引き出して育てるために、私たちは栄養豊かな土になる必要があるのだと思います。

(2005 年 2 月)

つむぐ

綿を糸より車にかけ
ていねいに繊維を引き出し
よりをかけて糸にすることと
子育ては似ています

子どもは子宮の中で地球の生命の歴史をたどるように成長していきます。生まれてからも同じです。その流れに逆らうように、効率的で便利な子育てなどしてはいけません。本来、非常に面倒で手間のかかるのが子育てなのです。

一つひとつの発達過程を、急がず、あわてず、ゆっくりと、ていねいに「糸をつむぐ」ように子育てしましょう。乳幼児期のていねいに関わる子育てが、将来の子どもの幸せにつながっていくと思います。

(2005 年 4 月)

生きる力

生きるということは
いろいろなことに関わるということ

生きる力とは 積極的に関わり続けようとする意欲のこと

「生きている」ということは、常に何かと関わり続ける状態のことです。そのため生きている限りは、関わりを拒否することはできません。

そして「生きる力」とは「積極的に関わっていかうとする意欲」のことだとも言えます。その関わりたいという意識は、どこから生まれるのでしょうか。たぶん、「好き」という感情が重要な鍵を握っているような気がします。好きだから興味をもつ。興味があるから関わりたくなる。その思いの強さがより強い積極性につながっていくのではないのでしょうか。

(2005 年 5 月)

大好き

遠くに見えたらワクワクします
近くに来たらドキドキします
目と目があったらズキンとします
あいさつできたらボーッとします
離れていったらシーンとします
見えなくなったらキューンとします

(小泉周二・詩集「誕生の朝」より)

「好き」という感情は不思議です。心と体を一瞬にして変化させます。

「好き」という感情は幸せの始まりでもあります。だから「好き」という感情に出会い、自分の世界を広げていくことができたなら、子どもたちの心は幸せに満ちあふれてくれるに違いないと思っています。

(2005 年 7 月)

心の育ち

自分のことが嫌いだったり
不満ばかりがいっぱいあったり
今の自分が受け止められないとしたら
心が育っていないのかも知れません。

今までの幼児教育は善悪の規範を教え込んだり、いろいろな力を身につけさせることに重点を置いた「一方向的に教える」行為だったのだと思います。しかし本来、乳幼児期の発達を考えると、教え諭すことだけではなく、双方向的で相互主体性をもった働きに支えられた「主体的に学ぶ」という要素を大事にしなければなりません。その学びの始まりには心の育ちが不可欠なのです。

子どもの思いに向き合うことが育てるということです。子どもの思いを受け止めることを繰り返して、初めて子どもは心の存在を知ります。そして共感という相手の思いを同じように想像し同調する能力も学んでいきます。その蓄積が自分を肯定する「心の満足」につながっていくのです。

(2005 年 8 月)

私とあなた

未熟な私とあなた
相手の存在を鏡にして

はじめて自分の姿に気づく
そしてその心の姿を認め合う
そんな積み重ねを育ちあいといいます

育ちは、未熟な「私」と未熟な「あなた」の関係から始まります。親は出産したときからいきなり親になれるわけではありません。子どもが少しずつ成長するように、親もまた親として成長していきます。つまり子どもを育てることで初めて親になれるのです。そう考えると、学ぶのは子どもだけではなく、親もまた子どもから学んでいくことが大切なことがわかります。

ヒトが誕生してからずっとこの繰り返しを続けてきた理由は、親は完成されたヒトではないということにあります。

子どもに健やかな成長を願うのであれば、未熟な「私」という大人と、未熟な「あなた」という子どもが、お互いを鏡にして自分の存在に気づき合うことが大切です。そして、その心の姿を認め合い、育ち合うことが必要なのです。

(2005 年 9 月)

育つ歩調

子どもの成長には
それぞれに歩調があります
その歩調にあわせて
一緒に歩いていくことが大切です

子育てに早道はありません。子ども自身が実感できる一つひとつの具体的な生活の積み重ねが、成長には必要だからです。無駄を排除して効率的な学習効果を設定したからといって、優れた人間に成長するわけではありません。むしろ逆に、与えられ指示された環境でしか生きられない人間を育ててしまう危険性が高くなるような気がします。

乳幼児期の成長に最も必要なのは、ゆったりとした環境の中で身近な大人のあたたかい眼差しと、一見大人には無駄と思える子どもの活動を十分に保障してあげることです。指示を与えるだけがしつけや教育や子育てだと思わずに、ときには子どもの生きる力を信じて待つてあげ、自ら育とうとする意欲と肯定感が生まれるための援助が必要です。

(2005 年 10 月)

語り聞かせ

親の内面から湧き出てくる物語を
日々子どもに語り聞かせる
子どもは繰り返される物語によって「真理」を学び
一瞬にして消えていく言葉を聞き逃さないように
一心に耳を傾けることを学びます

子どもは語り聞かせに夢中になって聞き入り、物語が終わらないでほしいと願い、同じ物語を何度も聞きたがります。繰り返して聞くのが楽しいのです。読み書きがまだできない幼い子どもたちのコミュニケーションは、言葉（語り）によって支えられています。口から発せられる言葉にはリズムがあり、規則的なリズムは、心臓の鼓動のような心地よい安心感をもたらします。その繰り返しがとても大切なのです。その中から豊かな想像力が芽生え、子どもだけに許される子ども時代を十分に体験することができます。

読み聞かせを早く習得させることに重きを置くのではなく、語り聞かせを十分にあげることが、将来文字にイメージを膨らませることができる豊かな大人にしてくれるのです。

子どもはいきなり大人にはなれません。「英才教育」や「しつけ」を徹底的にすれば、いわゆる良い大人になるということもありません。子ども時代を十分に保障された分だけ、人間関係が充実した大人になれるのだと思います。

自由で豊かな想像力を持った人に成長してほしいと願うなら、子どもにやさしく静かに、心に浮かんだ物語を語り聞かせてあげることが必要なかもしれません。

(2005 年 11 月)

身近なものとおそぶ

野の花や土や風など
身近すぎて見過ごしがち
何も言ってはくれないけれど
気持ちをやさしく揺り動かしてくれます

朝まだ湿り気のある土に、やわらかい日差しのベールが重ね合わされる様子が好きです。
遠慮がちに野の花が一輪あるのが好きです。
小さな葉先に朝露があれば、自分に潤いを得たみたいでうれしくなります。
遠くにたなびく雲があるのが好きです。
小鳥が風とたわむれる様子が好きです。
船の汽笛がかすかに聞こえるのが好きです。
静寂の朝の全てが私をやさしく揺り動かし、豊かに満たしてくれます。
こんな、ささやかなものに宿る魂に浄化される幸せに感謝します。

子どもたちの今が成長の朝とするなら、汚れのない無垢な気持ちで周りの小さな存在を好きになってほしいと願います。まだ生きることがはじまったばかりだから、純粋に周りにあるものと戯れてほしいと思います。

(2005 年 12 月)

あなたにありがとう

私を支えるものは
あなたの笑顔
黙って話をきいてくれるだけで
自分の弱さを好きになれる
あなたがいてくれるから
がんばれる

あなたが友だちでいてくれてありがとう。
あなたがお父さんでいてくれてありがとう。
あなたがお母さんでいてくれてありがとう。
周りのみんなが私を支えてくれるから、くじけそうなときも少しがんばれる。
安心してそばにいられるから、自分のままでいられる。
いっしょに笑ってくれて、いっしょに泣いてくれて、いっしょに怒ってくれるあなたに、
心のなかでそっと「ありがとう」をつぶやきます。
あなたのことが大好きだから、自分の気持ちも大切にできます。
これからもずっといっしょにいてください。

子どもの幸せとは、そんな気持ちの中でいつまでもいられること。そのはじまりは、「あなたが私の子どもでいてくれてありがとう」の気持ちで、子どもの心を抱きしめてあげること。

(2006 年 1 月)

自然な心の芽生え

一点のかげりもなく
他に注意をそらすこともなく
湧き出てくる愛情を持って接する心の動きこそ
最も重要な「愛着」です
そこから自然に心が芽生えはじめます

子どもの心は対象に対してとても敏感で繊細です。親が都合や気分で接すると何かなんだかわからなくなります。だから無条件の愛情を抜きにして子どもの心は育たないといえるのです。そして怖いのが、親の都合で態度に二重性があれば、子どもはダブルバインド（二重拘束）を受けてしまうということです。例えば幼い子に、「おやつを食べなさい」と言ってお菓子を出す。子どもはお菓子の破片を床にこぼしながら、おいしそうに食べる。そのとき「そんなにこぼすなら、もうお菓子はあげない」としつけのつもりで怒ったとすれば、子どもの心の中には親の心を判断しがたい「???」がいっぱい残ります。このダブルバインドは極めて危険なゆがんだ「愛着」の向け方なのです。今社会で起きている事件の一つの原因にこのダブルバインドを取り上げる学者もいるほどです。

子どもにとって裏切られる心配のない安心できる大人でいつもいたいものです。

(2006 年 2 月)

心の帰るところ

すべてを包み込んでくれる人
ゆっくりとやさしく流れる時間
あたたかい日だまりのある場所
そこが心の帰るところ

人は脳（こころ）の損傷をある程度回復する力を持っていますが、また逆に回復を阻害する要素も持ち合わせています。

前者の場合は、人生の中で最も幸せを実感した子ども時代の環境（人や場所）に再び身を置くことで、不思議とその力が生じてきます。後者の場合は、ストレスを感じる環境にいる場合です。

脳細胞は 20 歳を過ぎるとひたすら死滅していき、再び新しい脳細胞は作られないというのが定説です。ところが子ども時代に最も幸福だった経験があれば、その環境に再び身を置くことで部分的に脳神経（ニューロン）が新しく作られることがあるそうです。

この点からも、乳幼児の育ちには、無条件に最大限の幸福を実感できる環境が大切なのですね。あの子ども時代に戻ってみたいと思えるような、あたたかく豊かに育つ環境をみんなで手づくりしましょう。

(2006 年 3 月)

子どもと一緒に笑う

瞳を見つめあい
笑いを重ねるとき
心と心がやさしくひとつになる

それが「親子のきずな」のはじまり

喜びから生れる笑いは、幸福を呼ぶおまじないです。わが子に対して、「あなたの全てが大切です」と思う瞬間に喜びが満ちあふれ、親も子も心の中に幸せが訪れます。

喜びのない人は悲しみもないと言われます。喜びと悲しみの感情は、背中合わせの感情だからです。悲しむべきときに怒るのです。いらだつのです。キレルのです。そして人のせいにばかりします。そんな人に、よく社会は「我慢が足りない」「辛抱が足りない」と決めつけ、厳しくしつけなければいけないと言います。しかし、そうではありません。乳幼児期の「喜び」「笑い」の体験が不足しているのです。幼児期は親の感情と共に育っていきます。育ちに効率的な飛び級はないことを知り、子どもと一緒に積木を積み重ねていくように、一つひとついいに寄り添っていくことが一番。そして笑顔が一番。一緒にいつも笑っていれば、もっと一番。

(2006年5月)

おいしいものを食べるより ものをおいしく食べる工夫

昨年のお泊り保育の朝食は、炊きたてのご飯とみそ汁とたくわんでしたが、子どもたちの食欲は旺盛でおかわりを何度もしながら楽しそうに食べていました。お友だちと一緒に食べるうれしさもあったのでしょうか、なんといっても炊きたてのご飯がおいしかったのでしょう。出来たてのみそ汁と保護者提供の手作りたくわんがまた最高でした。

料理をおいしく食べるには、食材が本来持つ味を最大限に引き出し、出来たてを食べることです。それに家族と一緒に食べるという条件の三拍子が揃えば、食事の時間が幸せのひとつになると思います。

(2006年6月)

両手はね、 好きな人を抱くためにあるんだ

38歳で大腸ガンを告知され、最期のときまで、子どもたちに、生きるために大事なことを語り続けた高橋一二三さんの話です。

亡くなって数年経ってから、長男がお母さんに話してくれました。

「お父さんが教えてくれたの、ぼくたちみんなにね。お父さんがベッドで手を出して、両手は何のためにあると思うかって聞くの。ぼくたちはボールを受けとめるためとか、ご飯を食べるためとか言ったけど、お父さんは、みんな合ってるけど、みんな違うって。両手はね、好きな人を抱くためにあるんだ。だけど、体だけを抱くんじゃない、心までしっかり抱くんだって。心を抱きしめたいくらい好きになれた人でなければ結婚なんかしちゃ駄目だって。お父さんはお母さんのこと、ほんとうに好きだから、心まで抱くんだと言ってたよ」。

4人の子どもたちは、相談したいことや困ったことがあると、今でも近くにあるお父さんのお墓に行ってお父さんに相談するという。(2004年9月、日本ホスピス・在宅ケア研究会でのエピソードより)

もし、一つだけしか子どもにしてあげられないとすれば、私は迷わず、「無条件の愛情を示してあげる」と答えます。なぜなら、子どもは愛されるために生れてきたのですから。

(2006年7月)

子どもの発達が少しくらい遅くても その分、しっかり充実して育つ

子どもの発達が他の子と比べて遅いと気になるものですが、そんなとき焦ってはいけません。

発達の早い遅いを乗り物に例えてみましょう。飛行機や新幹線で移動すれば、速く目的地に到着できますが、そこにたどり着くまでの経験はとても少ないですね。ところが、各駅停車の列車や自転車ですと、その道中でいろいろな経験ができます。歩いて移動するとなると、もっと多くの経験ができます。育ちには出会いや見聞きして感じるという具体的な体験が多いことがとても大切なのです。

(2006 年 8 月)

多くの体験をすることが 最も大切な学習

乳幼児心理の特徴のひとつに、「具体性」というものがあります。

日常の身近な人の考え方や行動が、乳幼児にとっては最も安心して理解しやすい具体的なお手本です。乳幼児の学習は模倣活動から始まり、それを少しずつ発展させていきます。わかりやすく言うと身近なものを「まね」ることが学習なのです。

乳幼児期の学習は、テキストの知識をいっぱい詰め込むことではないのです。将来の知識のネットワークの充実（具体的に役立てることができる知識同士の結びつき）は、子ども時代の実体験の多さと比例します。実体験は具体的に理解するための学習です。この実体験の中で失敗の繰り返しや喜怒哀楽の感情を経験することは大変貴重なことなのです。そしてそれが生きる力にもなっていきます。

(2006 年 9 月)

子どもの関心に関心を寄せることが、何よりも大切なこと

保育先進国と言われる国の保育に対する考え方を少し紹介します。

●ノルウェー政府文書から

「人生の一つの段階としての子ども時代は、それ自体きわめて高い価値をもつ時代であり、子どもにとっての自由な時間、独自の文化そして遊びは決定的に重要なものである」

●イタリア・レッジョエミリア市の教育実践から

「子どもの活動の底にあるステキな興味・関心を発見・理解しようとして子どもにかかわることが、保育のもっとも重要な仕事になる」

●ニュージーランド教育省発行の幼児カリキュラム「テ・ファリキ」の特徴

「心地よく、安心できる自分の居場所があり、自分の力を発揮する機会があつて、物語・自然・文化、そこに生きる人たち等との出会いと対話を通じて、この世界の意味とそこで生きる意味を実感し、学ぶ意欲と力をつけていく。そういう生活をしたいという子どもたちの願いをしっかりと受け止め、実現するための領域設定が必要である」

未来の労働力として教育・訓練の重要性ばかりが強調される日本の幼児教育の流れと比べ、「人間が生きること」に真摯に向き合ったとても豊かな内容を持っていると思います。

(2006 年 10 月)

なつかしい風景の一部のような大人でいたい

子どもたちは、いろいろなものの影響を大きく受けながら成長していきます。

その影響力を「覚えさせる」方向に結びつけてしまうのが、早期能力開発と呼ばれる教育です。しかし、「記憶する」ことだけが人間の全ての価値を決定するかのような考えには、非常に違和感を覚えます。

今、問題にすべきは「心の問題」です。「心の育ち」は、乳幼児期の人と人の関係の中から芽生えてきます。そして、心を映し合う関係の積み重ねがあって、はじめてお互いの心は育ちます。心が育った子は主体性を持って、相手の主体性も認めることができます。これが社会性なのです。

大人は「トトロ」が眠る大きな樹木のように、あたたかく、安心できる存在でいてこそ、子どもは自分の心を育てながら成長していけると思います。風景の一部にとけ込んでいるけれど、いつもしっかり見守っている大人になれるといいですね。

(2007年2月)

思い出のかたち

みんなそれぞれに思いがあるから
心に残る思い出の風景も違う
思いはかけがえのない大切なもの

生きている限り、生きている人の数だけ、違う思い出がある。
それぞれに違う心を持っていれば、思い出のかたちが違うのは当然。
そんな思いは何よりも大切なもの。生きていくかたちさえ変わってくるほど大切なもの。
やがて、大人になったときに、生きることを支えてくれるのは、幼い頃の思い出。
そんな思い(心)が、ゆっくりと時間をかけてかたちになっていくのが、乳幼児期です。
ていねいに、子どもたちの心の中に「あたたかい日だまりのある場所」をつくってあげましょう。
そこがこの世で最も大切な「心の帰るところ」になるのです。
生きていくために必要な場所だから、ないと困るのです。
目に見えない思い(心)だけど、いつも子どもたち一人ひとりの思い(心)を感じていたいと思います。

(2007年3月)

私はあなたを当てにしてしか、生きていきません

「私」が「私」であるのは、「あなた」という他者がいて、「私」をこういう人間だと映し返してくれるからです。「私」に自信があるとすれば、それは「私」が一人でかたちづくれるものではなく、「あなた」が「私」を肯定的に評価してくれるからです。(鏡の機能)

しかも、「私」の考えには「あなた」をはじめ他の人々の考えが流れ込み、どこまでが私のオリジナルな考えなのか簡単には切り分けられません。「私」という存在は「あなた」を鏡にして、「あなた」を取り込み、「あなた」を当てにしてしか生きていきません。(マルティン・ブーバー『我と汝』より)

20世紀の哲学者で、社会学者の言葉を紹介しました。今、育ちの中心に置くべき課題は、個体能力の発達はもちろん、「私」と「あなた」という関係のバランスをどのようにして獲得するかということなのです。勝ち負けも、できることが増えることも、たくさんのことを憶えることも大切だけれど、それだけで人間の抱える問題が解決するわけではありません。

なぜなら、「幸せ」は周りの人間関係の中でしか成立しないからです。

(2007年4月)

ホッコリした生活

ゆっくりとていねいに
心の関係を積み上げていくこと
それが保育園の生活

今、子育て先進国の研究者たちは、乳幼児期に母子間の愛着がしっかり形成され、ていねいに信頼関係（安心できる心の基地）を築いていくことが大切であると考えています。

簡単に言えば、膝の上に抱いた子どもの温もりから、ちゃんとその子の感情（心）を受信でき、応答できることが大切なのです。

子どもにとって、大人の勝手な感情や命令に振り回されることは、恐怖であり、迷惑なものです。いつもヒヤヒヤしながら、自分の感情を出せないでいるのです。そんな乳幼児期を過ごしてしまうと、大きくなってから乳幼児期に出せなかった感情を周りの人に爆発させる時があります。それがいわゆる荒れる・キレル反抗期と呼ばれるものです。

怒りの感情をコントロールできるかできないかは、乳幼児期の愛着や信頼関係と深くかかわっています。だから、ていねいな心の関係の積み重ねが大切なのです。

(2007 年 6 月)

いっしょに子育て

ひとりでは

旅行に行っても、ご飯を食べても

つまらない

子育てだってひとりじゃつまらない

誰かといっしょにいと、なんだか安心しませんか？同じことをしていても、ひとりでやるのとは大違いです。

子育ても同じです。本当は楽しく幸せなはずの子育てが、ときとして苦しみに変わることがあります。ひとりで何でも抱え込んで子育てをしていると、不安だけが大きくなり、自分がやっていることが良いのか悪いのか分からなくなるからです。

そんなとき、子育ての仲間がいっしょだと大助かり。悩みも楽しみも共有できるから安心もできます。

保育園はまさにいっしょに子育てができる場所。だから、「いっしょに何かをすること」を最も大切にしています。

(2007 年 7 月)

今のわたしだけが本当のわたし

子どもはいつも、今のこの瞬間のことを見てもらいたいと思っています。

大人は過ぎ去ったことや、遠い未来のことばかり語りたがるけれど、子どもにとっては今は宝物のように大切なのです。

あるがままの子どもの姿を受けとめ、その思いを知り、わかろうとする大人を子どもは大好きです。

子どもと「正面切って向き合う」とは、きっとこのような姿のことなのでしょう。

子どもの今の思いと言い分をちゃんと受けとめれば、成長にしたがって今度は、大人の思いと言い分を受け止められる子どもに育ってくれることでしょう。

大人と子どもの関係は、自分と鏡の関係のように実際の姿しか映し出してはくれません。

(2007 年 8 月)

育ちには

たくさんの人の心と体が必要です

子どもは人との関係のなかで心も体も育てていきます。だから、周りに愛してくれる人がいないと子ども

は自分の命を育てることができません。

また親と子は、子どもの「育つ力」が、親の「育てる力」を引き出し、親の「育てる力」が、子どもの「育つ力」を引き出すという、お互いさまの関係（相乗的相互作用）になっています。

単純に、親が子どもを育てるという一方的なものではないということです。だから、厳しく怒ることばかりでは、自分の気分（大人のわがまま）に従わせるだけのことで、大きくなったらまわりの人に怒りなさい、キレなさいと言っているようなものです。

繰り返します。子どもはまわりに愛してくれる人がいないと育ちません。子どもの気持ちをわかろうとする人がいないと育ちません。

(2007 年 9 月)

子どもはみんな育てるもの

昔は子どもは個人のものではなく

地域みんなの宝ものでした

だからみんなで子育てに関わっていました

保育園の特徴のひとつに、多くの大人に育てられているということがあります。これは実はとても大切なことで、昔は普通に行われていたことです。だから、「人の家の子に余計なことを言わないで！」などということはありませんでした。地域全体で無条件に子どもの存在を認め、受入れ、慈しむように育て合うことで、子どもはもちろん大人も成熟した社会性（互助性）を持てたのでしょう。昔の方がもっと子どもらしかったとか、もっと大人が大人だったと言われるのはある意味正しいのかも知れません。

このような多くの大人との関わりは、家族だけの狭い価値観にしばられることなく、多くの異なった価値観との出会いにつながり、そのことで、より広い社会性を身につけることになります。

保育園の保護者同士が、お互いの悩みを相談し合ったり、行事を盛り上げるためにみんなで共同作業をしたりと、自分の子どもだけではなく、みんなの子どもたちのために関わり合うことが、実は理想的な子育てなのではないでしょうか。だから、みんなが家族だったらいいなと思っています。

(2007 年 10 月)

命を伝える子育て

ほんの一瞬の命だから

二度と会えない命だから

しっかり見つめたい

すべての命がきらめき合うことを望みながら、生きるためにとうそぶき、無駄に争い命を奪い合う。そんな人間の愚かさにあきれながら、決して望みを捨てないのも、また人間です。

人間の歴史を華々しい発展の積み重ねの部分だけで捉えてはいけません。発展の陰には消滅があるし、幸福の裏には不幸があります。すべての歴史には表裏があり、一面だけで捉えてしまうと大切なことを見落としてしまいます。

大事なのは、すべての命が等しく大切であるということです。日々の命をつなぐために食を得るだけでも、他に生きている動植物の命を奪う必要があります。だから、せめて奪う必要のない命だけはそっとしておきたいと思います。

人生を競争で捉え、他者に勝つことだけを目的として知識をいっぱい与えることよりも、ちゃんと「命」に向き合い、「命」を見つめ、「命」の大切さを伝える子育てを大切にしていきたいと思います。ほんの一瞬の命だから、二度と会えない命だから。

(2007 年 11 月)

そばにいてほしい

心に寄り添ってもらうことが
みたされるということ
それが子どもにとって
いちばんうれしいプレゼント

心はガラスのように壊れやすい存在です。だから本当は大切にしなければいけないはずなのに、そんなことはすぐに忘れてしまいます。見えないから面倒だからとおろそかにしてしまいます。でも心があるから人間でいられるのだし、その心は愛で包まれていないとすぐに閉じてしまうのです。

子どもの小さな心はとても壊れやすく、いつも誰かそばにいないとすぐに粉雪のようにとけてなくなってしまう。どんなときでも、「あなたのそばにいるよ」というメッセージが必要なのです。

(2007年12月)

やさしさがやさしさを育てる

親と子の心の交流から感情が育ち
経験した感情の内容と密度から
その子の世界がつくられる

感情はひとにとって最も基本的な要素のひとつですが、これはおとなが教えればよいというものではありません。おとなのもつ感情が子どもの心に映し出され定着したものが、子どもの感情になっていくものです。具体的に言えば、言葉で「やさしさ」の大切さを伝えることよりも、子ども自身が「やさしさ」の経験をする方が人格形成につながるということです。

子どもは驚くほど敏感に心の動きを感じ取る能力を持っています。いくら言葉で飾ってみても、すぐに相手の心の状態を見抜いてしまいます。だから子どもに接するときのおとなの感情は大切なのです。

やさしさを育てるのはやさしさの感情で、憎しみを育てるのは憎しみの感情です。怒りも悲しみも接するおとなから子どもの心に映し出されます。そう考えてみると、子どもの育ちに必要なものは、豊かな感情を十分に経験させてあげることではないでしょうか。

(2008年2月)

一番でなくてもいいよ

競争が目的なのか
目標を達成することが目的なのか
「うさぎとかめ」の話みたいですね

競争に勝つことを目的にして子育てすると、ある時期から子どもは自分がどこに向かおうとしているのかわからなくなってしまいます。

大人の意に従わせるだけの子育てもまた、自分が何者かわからなくなってしまいます。

大きくなってから、子ども自身がいろいろな問題を抱えてしまう原因はほとんど乳幼児期にあるといってもいいほど、この時期の子育ては大切なのです。

「一番でなくてもいいよ、あなたは私にとって世界で一番なんだから」という思いで育てられることを、子どもたちは願っています。

(2008年3月)

修正

子どもはいつも本気

子どもはいつも本気で生きているから
大人の本気さもすぐに見抜いてしまいます
「いいかげんさ」は子どもにとって一番いらぬもの

子どもは生まれた瞬間から全力で生きている。
だから、本気でつき合ってくれる大人が大好きです。
子どもの本気と大人の本気がぶつかり合うことで、手応えを感じられるからうれしいのです。
本気こそが子育てにとって一番大切なもの。
子どもにいいかげんな対応をしていたら、やがて本気を出すことをあきらめてしまうかも知れません。
その結果、大人にも期待をしなくなって、適当な生き方しかできなくなったとしたら悲しいですね。
本気、本気、いつも本気！

(2008 年 4 月)

月までも届く子どもの思い

月をつかまえたくて
思いっきり何度もジャンプしてしまう
そんな子どもの思いを大切にしたい

夕方、園庭であそびながら、空にお月様を見つけた 3 歳児クラスの男の子。
お月様をつかまえたくて、
“ジャンプ！ジャンプ！ジャンプ！”
3 回ジャンプしたけれどつかめない。
そばにいた保育士の方を振り返り、
「とどかなかった……」としょんぼり。

とてもほほえましく、また少し切なくなってしまうエピソードですね。こんな子どもの思いに保育士は、
「お月様をつかまえたかったのに、届かなかったね」とていねいに受け止めました。保育園では毎日子ども
もの数だけ、それぞれの豊かな物語が展開されています。

最近読んだエーリッヒ・ケストナーの『飛ぶ教室』には、次のように書かれていました。

「どうしておとなはそんなにじぶんの子どもをすっかり忘れることができるのでしょうか？そして、
子どもは時にはずいぶん悲しく不幸になるものだというのが、どうして全然わからなくなってしまうの
でしょうか？……」。

自分の子どもの頃のことを思い出してみませんか。そうすることが、豊かな子育てにつながるのかも知
れません。

(2008 年 6 月)

みんなが我が子だとしたら

世界中の子どもたちが
みんな我が子だとしたら
世界の見方もきっと変わるでしょう

子どもは一人ひとりかけがえのない存在です。大切な存在とそうでない存在で区別などできるはずありません。もし世界中の子どもたちが自分の子どもだと想像したら、きっと争い事も戦争も飢餓も人ごとではなくなるはずです。そして真剣に問題解決のために取り組むはずです。

子どもはみんな愛されるために生まれてきます。だから例外なく大切にされたいと全身で訴えてきます。いつも私が言い続けている言葉があります。それは「みんな自分のお子さんだと思ってください。そして一つの大きな家族として育ち合いましょう」という言葉です。子どもたちがいつまでも大人に期待をしてくれるように、みんなで愛し続けましょう。

(2008 年 7 月)

だいじょうぶだよ

心が迷子になったとき
泣きたいほど不安なとき
支えてくれるのは温かい言葉

いつも全力で今を生きている子どもたちは、人や物や自然などの環境と関わり、そこから多くのことを学び、成長・発達しています。それでも、ときには自分の思いと違う結果になるとことがあります。実はこの経験がとても重要で、可愛そうだからと子どもの思い通りになる環境の中だけで育ててしまえば、子どもが自ら育つ機会を奪ってしまうことになりかねません。

大事なのは、多くの葛藤を経験させて、子ども自身が自分で解決したんだという満足感と達成感を体験させてあげることです。そのためには、安易な手出しはできるだけしないで、子どもの育つ力を信じ、じっくりとつき合い、見守る大人の態度が必要なのです。

そんなときの大人の思いを伝えるのにふさわしいのが、「だいじょうぶだよ」というおまじないの言葉です。そして同時にこの言葉は、「いつもあなたの味方だからね」という感情も伝えてくれます。

(2008 年 8 月)

「子どもの思い」「大人の思い」

思いは言葉になり
人から人へ運ばれる
そこから幸せも生まれる

人間は本当は何もわかっていないのに、何だかわかったような気になってしまいます。中途半端な知識で全て解決できそうな気さえしてしまいます。でも本当に聡明な生き方とは、何も分かっていないことに気づくことだと思います。そしてそこから真摯な視点が生まれ、自由な思考を奪っている「常識」から解放され、主体性を持った「良識」が生まれるのではないのでしょうか。

子育てで一番やっていけないことは、大人の勝手な思いこみの価値観を一方的に押しつけることです。そして一番大切なことは、子どもの発達過程をわかつて、「子どもの思い」と「大人の思い」の双方向性を持った「応答的關係」をもつことです。

(2008 年 10 月)

「心」があるから人間

思いを重ねることから
心の成長が始まる

園庭で遊んでいると、ちゅうりっぷ組（3歳児）の子どもたちが飛ばしたシャボン玉がフワフワと風と戯れていた。それを見つけた1歳児のT君が「あっあっ」と言って指さし、保育士に抱っこを求める。

「抱っこされてシャボン玉を見たかったんだね」と話しかけると、ウンウンとうなずき、シャボン玉をつかもうとするしぐさをする。保育士もT君と気持ちを重ねようと、同じように手を伸ばしつかもうとした。「とれないね」と言ってT君を見ると、切なそうな表情でシャボン玉を見つめている。

自分の思いが保育士に伝わり、安心して過ごしているT君。様々な思いを感じ、それを伝えてくれることがうれしい。

1歳児担当の保育士が書いたある日のエピソードです。このような目には見えない気持ちのやり取りこそ大切にしたいですね

(2008年11月)

「私は私」から 「私はみんなの中の私」の 関係のバランスがとれることが 人間の成長

成長発達の上でとても大切な要素の一つに、「私は私」の世界から「私はみんなの中の私」へと関係の世界が広がることと、そのバランスがとれるということがあります。「私」が大切なのはみんな同じです。だからといって、みんなが「私」だけを言い出したら、この世界は成り立ちません。

ところがこんな簡単なことをなかなか学習できないのが、また人間なのです。世の中のトラブルは全て「私」と「私」のぶつかり合いです。「私は私」と「私はみんなの中の私」の関係のバランスがとれていけば、もっと生きやすい社会になるのではないかと思います。

(2008年12月)

本当に大切なものは「思い」

目には見えないけれど
大切なものがあることを伝えるために
子どもへの思いを言葉にしてみましょう

あなたは、私に本当の生きる意味、生きる力を教えてくれました。
うれしくて笑ったり、悲しくて泣いたり……、そんなふつうの毎日が、
かけがえのない大事なものと気づかせてくれました。
あなたの笑顔は、私にとって元気の源です。
親子で共育ち……！これからも、よろしくね!! （保護者の「言葉のプレゼント」より）

(2009年1月)

子どもの可能性を受け渡す

育ちの連続性を考えるのが大人の役割
だから次の育ちのステージへ
子どもの可能性を大事に受け渡したい

オタマジャクシは親に育てられなくてもカエルになります。しかし人間は人間に育てられて、はじめて人間になれるのです。その人間としての基礎が作られるのが乳幼児期です。基礎となる人間の原型は、そ

の後の人生を左右するほど重要です。この大切な時期を、じっくりと確実に育てることが保育園の仕事です。決して早く高く育てることはしません。子どもとしての時間をじっくりと確実に体験するからこそ、その後の可能性も広がるからです。

子どもの可能性を次の育ちのステージへ大切に受け渡したいと思います。

(2009 年 3 月)

いっしょがすき

いっしょにあそんだり つくったり
おかあさんといっしょにすることがすき
いつもありがとう

保育園生活の最大の利点は、みんなといっしょに集団で生活できるということです。同年齢や異年齢の子どもたちと触れ合いながら、たくさんの経験ができます。この経験が、将来の社会性の大切な芽生えとなります。共に育つ過程にある子ども同士だから、気持ちがつながるうれしさや、悲しく悔しいトラブルもありますが、いろいろな関わり合いの積み重ねが、確実な成長の栄養になるのです。

そんな育ちの大切な要素がいっぱいある保育園生活を楽しむための初めの一歩が、実は「おかあさんといっしょ」という安心感です。この安心感が支えとなって生活の場を拓けていくのです。お母さんの存在はやっぱりすごいですね。

(2009 年 4 月)

違いを学ぶ

成長するということは
他の人の思いが想像できるようになること
素敵な人とは、違いの大切さがわかっている人

違いがあることを知る
違いがあることが当たり前であることを知る
違いがあってもよいことを学ぶ
違いがあっても通じ合えることを学ぶ
違いがある中での共通点を学ぶ
あすなる保育園の生活で、子どもたちに学んでほしいと思っていることです。

(2009 年 5 月)

本当に必要なものはほんの少し、 それを探すことが幸せに気づくこと

周りを見渡せば、特になくてもいいものがあふれているような気がします。欲しいものはいっぱいあるかもしれませんが、必要なものはそんなに多くはないはずです。欲しいものは更に欲しいものを呼び、際限がありません。自分にとって必要なものは何かを考えることが、自分自身を見つめることにつながり、そのことが幸せを見つけることになるのです。子育ても同じです。その子をちゃんと見つめることで、その子の望む幸せに気づけるのです。

(2009 年 8 月)

一人ひとりゴールは違ってあたりまえ

社会は、人々が同じ目標に向かって競争をするための場所ではありません。人の数だけ価値観があり、目標とするゴールがあるはずで、親の役割は、その子が本当に望む姿になれるように、お手伝いすることです。子どもは親の分身でもなければ、代わりに希望を叶えてくれる存在でもありません。子ども自身の生きる道を一緒に歩きながら探すお手伝いが、子育てなのだと思います。

(2009 年 10 月)

子どもの成長を守る

いっぱい守られて、大きく育つ

「子守り」とは、子どもを守ることです。

子どもを守るとは、子どもの思いや、立場を代弁することです。

子育てをしながら、「子どもがいてよかった」、

「成長に立ち会えてよかった」と思えたら幸せだと思います。

その幸せな感情は子どもをやさしく包み込み、

子ども自身も生まれてきてよかったと思うことでしょう。

(2009 年 12 月)

こころをすませば 見えてくるものがあります

こころを すませば きづかなかったものが

すこし みえるような きがします

とどかなかった おとが

すこし きこえるような きがします

あたらしい あさの すんだ かぜが

まだみぬ せかいを そっとはこんでくれます

(2010 年 1 月)

脳を器(うつわ)に例えれば、
乳幼児期は、その大きさが決まる時期で、
思春期は、厚さが決まる時期です。

人間の脳を器(うつわ)に例えるなら、小学校に入学するまでの乳幼児期は、器の「大きさ」が決まる時期で、思春期は器の「厚さ」が決まる時期だと言われます。

乳幼児期の脳(器)の大きさをよりよく作る方法は、子ども自身の主体的な「遊び」です。遊びからはパランスよく多くのことを学べます。

子どもの関心に大人が関心を持ち、その関心を見逃さずに、適切な援助をしていくことが育児なのです。あすなる保育園では、子どもの可能性を広げるために、一人ひとりの関心に関心を寄せ、集中して取り組める環境を用意し、チャレンジする気持ちを支えることを大切にしたいと考えています。

(2010 年 6 月)

幸せの原風景

幸せにはそれぞれにかたちがあります。そして幸せのかたちの原型は、乳幼児期につくられると考えています。

私はそのことを“幸せの原風景”と呼んでいます。だからこそ、乳幼児期は一生のうちで最も幸せであってほしいと願います。

心の帰る場所や記憶があれば、困難を乗り越え、生き抜く力をきつと持てると思っています。

(2010 年 7 月)

心が帰る場所

虐待を英語で「abuse」と言います。直訳すると「必要ない」という意味です。その言葉通り、虐待は育ちに最も必要のない要素です。2 年前に起きた秋葉原事件の公判で、被告人が事件を起こした原因を語っています。その中で母親に受けた虐待との関係を強調し、「屈辱的だった」と述べています。そして、ネットの掲示板が唯一『帰る場所』だったと説明しています。本来、「心が帰る場所」は幼少期の親との関係の中で、丸ごと自分を受け止めてもらった濃密な感情があった場所と時代のことだと思います。それを持っていることが、人間として育つためには大切なことなのです。

(2010 年 8 月)

子どもの世界は幸せがいっぱい

アリもトンボもダンゴムシも、みんないっしょにあそんでくれるお友だち
木はいつでも肩車をしてくれて、疲れたらやさしく抱いてくれる
さみしがりの風は、葉っぱや髪をゆすって誘ってくれる
のんびり空を泳ぐ雲は、おとぎ話の世界へお散歩に連れて行ってくれます
怒りんぼの心を やさしくなでってくれる水は いつまでもさわっていたいし
ほかほかの土は 足も手もほっこりと幸せにしてくれる
そんなお友だちに囲まれて、ゆっくりと子ども時代を過ごしましょう。

(2010 年 9 月)

あなたの瞳のなかに私はいます

私が私であるためには、あなたのまなざしが必要です
私が私を伝えるためには、あなたの受け止めが必要です
私は私で、あなたはあなた
いつまでたっても、ひとつにはなれないけれど
心がくっついたり、すこしそっぽ向いたりしながら
いつもいっしょに歩いています
私の瞳のなかに、あなたはいて、あなたの瞳のなかに、私はいます

子どもは、いつも大人の瞳のなかに自分の存在を確かめようとしています。それは、自分ひとりでは自分の存在を確かめられず、自分ひとりでは自分をしっかり肯定できないからなのでしょう。

(2010 年 10 月)

大好きだから まねたいのです

大好きな人から、子どもたちはすべてをまねて育ちます。

美しいと思うことも、汚いと思うことも、大切だと思うことも、憎むということも、愛するということも、争うということも、身近で好きな人の思いをモデルにして、「まねぶ」のです。

目に見えない「思い」をまねる子どもたちは、やがてその「まねた思い」を通して世界を見はじめます。

子どもは大人の映し鏡のような存在なのかもしれません。

(2010 年 11 月)

「求める」から「深める」へ

人間は常に何かを求めて生きています。しかし求めたものが得られるとそこで終わるわけではありません。さらに新しい何かを求めはじめます。これを子どものおもちゃに例えてみましょう。次から次に新しいおもちゃを与えても子どもはどこかで満足し、それ以降欲しがらないということはありません。際限なく欲しがるのです。そうなるとおもちゃと遊ぶ中での発見や想像や友達との交流が楽しみではなくなり、ただ単に新しいおもちゃが欲しいだけになってしまいます。つまりおもちゃを通して学んではいないということなのです。

学ぶというのは、何かにじっくりと向き合うことです。今の時代に必要なことは、ひとつのことに夢中になり、その結果「深める」楽しさを知ることではないでしょうか。

(2011 年 1 月)

まじめに生きている人が、バカをみない世の中に

コツコツと時間をかけてひとつずつ学ぶことを

からかわないでください

疑うことを知らない人を、だまさないでください

不器用だけどていねいに考える人を、けなさないでください

自分と違うからと、仲間はずれにしないでください

黙ってじっと耐えている人を、いじめないでください

まじめに生きている人を、笑わないでください

まじめに生きている人がバカをみる世の中は、とてもへんです

(2011 年 5 月)

乗り越えることより、立ち向かうことが大切

うまくできなくても、自分がやりたいことに熱中することはとても大事なことです。それが意欲を持った人間となるための大切な要素だからです。意欲とは、困難に立ち向かうということだと考えてみましょう。そうすれば、いくら失敗しようと気になりません。

失敗は、その数だけ経験を重ねられるということで、確かな実力を持つことに繋がる可能性のことだと思います。

子どもが将来自分の人生に意味を見だし、着実に自分の人生を歩いていくために、子ども自身がやりたいことに熱中できる環境を整えることが大切だと思います。

誰のものでもない自分の人生を歩けるようになること、すぐに人を批判したり、自分の失敗を人のせいにしたりしないような人間に育てることが、あすなろ保育園のめざす保育です。

(2011 年 9 月)

選べることの大切さ

子どもが何かに関心を寄せ、夢中になることはとても大切なことです。自分の意思で選び、それをより深く知ろうとすることは、学ぶ意欲にもつながるからです。

そして人間は、他人から決められた人生を歩くのではなく、自分で選んだ人生を歩くべきです。その始まりに関心を寄せ、夢中になって遊ぶことなのです。

(2011 年 11 月)

この子の何を育てますか？

人は自分自身で何かを育てながら生きています。それは優しさ、豊かさ、それとも、悲しみ、寂しさなど、気づかぬうちに、何かが自分の中で大きく育ち、その人になるのでしょう。

この子だけしか持たない宝物は何かを探すが、大人の役割で、それを大切に育てることが、大人の優しさだと思います。

(2011 年 12 月)

想像の瞬間から未来は始まります

こうしたいという自分のイメージがあれば

それを現実のものにするために、人は未来に向かって歩き始めます。

夢はあきらめない限り、いつまでも続くでしょう。

(2012 年 1 月)

耳をすまし、目をこらせば、 大切なものに出会えます

耳をすまして聞こうとし、目をこらして見ようとすれば、今まで眠っていた風景が生き生きと輝き出します。

その瞬間、心が動くからなのでしょう。

心が動けば、気づかなかったものと出会え、新しい世界が広がるはずです。そんなふうに、子どもの心が前向きに動くことを、私は育ちと呼びたいと思います。

(2012 年 2 月)

心も体も頭もぜんぶつかって、 春を深呼吸

春は自然の命がやさしく芽吹く季節です。保育園の小さな命たちは、その春の命とのふれあいに親しみを感じながら、戯れています。まるで少しずつ成長する春のやわらかい芽が、自分の育ちと似ていることに気づいているかのように。

保育園の小さな命たちは、一つひとつのかかわりの瞬間を、ぜんぶ大きなことがらとして受けとります。だから心も体も頭も使いながら、心ゆくまで春を味わってほしいと思います。

それがこの幼い命たちのお仕事です。

(2012 年 3 月)

自然と遊ぶことが、すべての始まり

子どもたちは自然の一部だから、驚くほど自然とうまくつき合います。

自然もまたそれに応えるかのように、いつも大きなふところ子どもたちを受け止めてくれます。

自然との関わりのなかで出会う色や形、音、香り、味、肌に触れる感触などを思う存分に楽しむことが学びの始まりで、すべての関わりの基礎となるのだと思います。

その意味で、自然と一体となる時期がどうしても必要なのです。

(2012 年 4 月)

どれだけの「不思議？」と出会えるかな

周りのすべてが不思議なもので、その出会いに瞳を輝かす子どもたちです。

保育園時代にどれだけのものと出会い、どれだけ胸をときめかせ、どれだけ頭の中に「？」を登場させるかが、育ちの充実に影響するのだと思います。

そんな子どもの世界を理解しながら、ゆったりと付き合うことが子育てです。

(2012 年 5 月)

「知識」をリアリティーのあるものにするために

美しいもの、素敵なもの、おもしろいもの、不思議なもの、臭いもの、汚いもの、痛いもの、こわいものなどが一緒くたになった世界は、子どもの「心」を動かし、「知」を発揮させ、「身」を躍動させてくれます。

それなのに、現代社会は効率良く「不便で不快なものを根こそぎ無くすこと」をめざしています。そのことが子ども達の体験を奪い、「知識」はリアリティーをはぎ取られたものとして学習することにならないか心配です。

一緒に、育ちに必要なことは何かを考えてみませんか。

(2012 年 6 月)

水や土や風とたわむれることが 豊かに生きるということ

私たちは水や土や風など自然に支えられて生きています。だから、それらと出会い、触れ合い、語り合うことが、豊かに生きるということなんだと思います。

水や土や風はどんな匂いがするのかな？

どんな形をしているのかな？

どんな音がするのかな？

子どもたちは、いろいろな「？」を解くため、今日も全身を使って水や土や風と戯れています。

(2012 年 7 月)

ミミズがおしえてくれること

どちらが頭で、どちらがおしりかわからない、一本の“くだ”のようなからだをして、毎日土の中でモゾモゾとくらしています。土の中にうまれて、やがて土にかえってゆくだけ。そんなミミズは、土を食べてまっすぐな体で消化すれば、ふかふかの豊かな土にしてくれる不思議な力をもっています。

ミミズの一生はこれだけ。このシンプルに豊かさをもたらすミミズは、じつにいいです。
そんなミミズを見ていると、「あなたにはどんな豊かさがありますか？」と問われているような気がします。

(2012 年 8 月)

まじめにおもしろがる

子どもの遊びをみていると、常におもしろさの発見をくり返しているような気がします。おもしろいことを探すのが、子どもにとっての日課なのでしょうか。

おもしろさを発見して、それに没頭して世界が広がり、また新たなおもしろさを発見をすることが、子どもにとっては一番大切な学びのようです。

そこで改めて、子どもの生きる力、学ぶ力を育てるためのキーワードは、「おもしろがる」ことなのだという事に気づかされます。

それも「まじめにおもしろがる」態度が必要だということを、子どもたちに教えられているような気がします。

(2012 年 10 月)

やりたいと思う心を育てる

子どもが 未熟なのはあたりまえ
できないことだらけだけど
やってみたい思いは
風船みたいに いつもふくらんでいる
できなくても きっとできるからねと
待っていてくれさえすれば なんでもできるのに
せっかちになって 待てないだけで
せっかくの やりたいと思う心が しぼんでしまう

(2012 年 12 月)

思いを分かち合うことの大切さ

子どもたちは知っています。この世は美しいもの、未知なもの、神秘的なものにあふれていることを。
だから、それらに関わりたいたいといつも思っています。

そんな豊かで純粋な子どもたちの思いが失われないように、私たち大人はいつもそばにいて、その感動を分かち合う必要があります。

(2013 年 1 月)

そばにいる大人の姿が その子をかたちづくれます

子どもは毎日“はじめて”を経験しながら生活しています。
その経験が“発見の喜び”として大人と共有されていれば、意欲的に豊かな世界を拓げていくことでしょう。

何かに出会ったときに大人を“ふり返る”のは、大人の姿を参照して自分にとっての意味づけをするた

めです。

だから、そのときの大人の姿がとても大切であることを子どもが教えてくれます。

(2013 年 2 月)

とことん かかわりあう

ほいくえんは、いろいろな人と思う存分かかわりあえるところです。

おうちとは比べものにならないほど、たくさんの人と毎日せっせとかかわりあっています。

かかわりあうことで、いろいろな思いが交じりあい、衝突しあい、重なりあい、育ちあうのです。

もっと、とことんかかわりあって、素敵で、豊かな人になりますように…。

(2013 年 3 月)

生きている世界とふれあいながら育つ

木にほっぺをくっつけると、なんだかあたたかくて、ほっとした気持ちになります。

春は、いつもやわらかく笑っていて、子どもたちそれぞれの思いを、やさしく包み込むように見守ってくれます。

生きている世界とふれあいながら育つ子どもたちは、ゆったりとした時間にも支えられて、少しずつ自分の芽を息吹かせています。「急がない、急がない」が育てのおまじない。

(2013 年 4 月)

育ち合うとは 弱さを認め合うこと

弱いから、人より強くならなければいけないのですか？

信用できないから、マニュアルが必要なのですか？

ムダをはぶくために、システムを設定するのですか？

心配だから、教え続けなければいけないのですか？

それぞれが支え合うことは、だめになることですか？

弱さを認め合うことは、してはいけないのですか？

育ち合うとは、弱さを認め合うことなのではありませんか？

(2013 年 5 月)

見つめる視線の先に 子どもの未来がある

視線の先に未来を探しているかのように、子どもたちはいつも何かをじっと見つめています。

不思議な世界に心が躍り、時の流れを忘れてしまうほど夢中に なりながら、自分の「？」をひとつずつ消化しています。

子どもの未来を保障するということは、子どもの「？」が消化されるまで、じっくりと見守ることなのでしょう。

「あせらない、あせらない」

(2013 年 6 月)

安心感で包み込むと、我慢強い子に育つ

子どもは乳幼児期に十分愛されなければ育ちにくい存在です。ほとんどの能力はこの安心感に支えられて育つのです。

多少の不安やいらだちを抱え込んでいても、必ず安心感で包み込んでくれるという確証があるから、我慢できるのです。

決してしつければ、我慢強い子に育つわけではありません。ただ力関係に従っているだけです。

乳幼児期の子どもの感情コントロールを育てるためには、安心感で包み込むことが一番です。

(2013 年 7 月)

葉っぱさんとお話しできたよ

じっと見つめていたら

葉っぱさんは へんてこなお顔になって笑っていました

きつと照れ笑いかな

目を寄せて見つめるあなたに

困ったようすです

あなたと葉っぱさんのにらめっこ

もう まいった まいった

葉っぱさんも とても楽しそうでした

(2013 年 8 月)

児に草履をはかせ秋空に放つ (尾崎放哉)

いつの時代も子どもの姿は変わりません。自然に溶け込んでしまうほど、子どもは自然そのものです。だから、その中で戯れながら育ちたいと思っています。

風景の中にしっかりと立ち、澄んだ心で周りを見ている子どもの思いに、そっと耳を澄ましてみませんか。

急がないで、子どもたちの事情や意味に共感しながら、ゆったりと「待つ」姿勢が、乳幼児期の育ちの条件です。

(2013 年 9 月)

心を合わせるということ

心を合わせるということは、簡単なようで難しいです。

いつも自分のことだけに精一杯で、人に感情をぶつけたり、無視することは簡単だけど、自分だけでいいのなら、心はいつもひとりぼっち。

保育園の子どもたちは、それを知っているから、今日もせっせっせと、心を通わせ合っています。

(2013 年 10 月)

夢中になるとき そこに自分がいる

夢中になることは、うれしいことです。

夢中は、夢の中。

ふわふわ、そわそわして、

少し熱をもった自分がそこにいます
なんだか、うれしくなって、
夢に向かって歩きたくなります。

(2013 年 11 月)

木に抱かれながら ひとやすみ

園庭の主である 3 本ケヤキは、いつも子どもたちを見守っています。
それを知ってか知らずか、3 本ケヤキのなかは安心なようす。
一人二人と寄ってきて、いつの間にか満員御礼。
知らないあいだに、かぜもひとやすみ。
すると、みんなポッカポカに温かくなりました。
さて、これからどんなヒソヒソ話をしようかな。

(2013 年 12 月)

さがしものは、自然の中にかくれています

必要なものは周りの自然にかくれていることを、子どもたちは知っています。
ここにも、あそこにも。さがしものを見つけるたびに、瞳がキラキラと輝き、出会った喜びが、歓声とな
ってこだまします。
自然のなかに、同じものは何ひとつとしてありません。その違いがうれしいから、子どもたちはさがし続
けます。

(2014 年 1 月)

ころろをつくりあう

ほいくえんの一日には、数え切れないほどの物語があります。
いろいろな経験の数だけ物語となり、心もつくられていきます。
みんなで生活しながら、心をつくり合っているのです。
自分ひとりだけの満足では、心はできません。
他の人と心がつながるから、幸せを感じ、それが心となるのです。

(2014 年 2 月)

違うのには意味がある

その人は、他の人とはちがうから、その人で、
みんな同じでは、つまらない。
大切なのは、ちがう人どうしが、響きあうこと。
すると、ふしぎなことに、それぞれが輝きはじめます。

(2014 年 3 月)

未来はいまここにある

未来は、手の届かない遠い先にあるのではなく、

今のこの瞬間、ここにいます。
目の前の子どもこそ、実は未来そのものなのです。
だから、子育てをすることは、
自分の手で未来を育てることとも言えるのです。

(2014 年 4 月)

子どもたちには見えています

おとなには、もう見えなくなりました。
見えないから、大切にしないでいいと思うようにもなりました。
いつから、こんなに不自由になったのでしょうか。
もういちど、あのすてきな世界を見てみたいから、
子どもたちに、こころのすましかたを、
そっと、おしえてもらいます。

(2014 年 5 月)

いまここに何があるのか 気になってしょうがない

ここも、あそこも、あれも、これも、
まわりのすべてが気になってしょうがない。
だから、見つめて、触れて、耳を澄まして、味わって、
それから、胸一杯香りを吸い込んで、
今日も一日中、大忙しの子どもたちです。
毎日のすべてが体と心に吸い込まれていく、大切な時間です。

(2014 年 6 月)

みんなで育ち合うほいくえん

子どもどうし関わり合うことが、社会性の芽生えには大切です。
関わり合えば関わり合うほど深く考えるようになり、自分だけの世界から、みんなと一緒にの世界へと少しずつ広がってゆきます。
そこには、胸ときめくうれしさがあるからでしょう。
大人と子どもの関わり合いだけしかない環境より、みんなで育ち合うほいくえんには、育ちの栄養がたっぷりあるのでしょう。

(2014 年 7 月)

引き出してほしいのです

伝えたい思いがあります。
かなえたい希望があります。
そんな自分の思いをわかってほしいと静かに訴えています。
みんな、同じなのです。
子どもだって同じ。

本来の自分を引き出してほしいと願っているのです。
加えられるだけではなく、引き出してほしいのです。

(2014 年 8 月)

こころのおしゃべり

私ではない このひとは …?…?
私ではない このひとは だれ…?
私ではない このひとは なぜここにいるの?
私ではない このひとは なぜこっちを見てるの?
私ではない このひとは 私になにをしてくれるの?
私ではない このひとを あなただって教えてくれたけど…
あなたって だれ…?

(2014 年 9 月)

感情がこぼれる

保育園の庭には どんぐりが降ってきます
見つけると もうたいへん
さきにとられたことが悲しくて
泣いてうったえる目には涙がいっぱい
ついに あふれて こぼれだしました
涙は 人の心を動かすふしぎな力をもっているようです
せんせいもいっしょに せっせとどんぐり探し
やっと見つけると こんどはふたりで にっこり

(2014 年 10 月)

う～んこらしよ、どっこいしょっ!!

だいこんは しっかり だいちにしがみつки
とても ひとりでは ぬけないので
ふたりちからをあわせて う～んこらしよ どっこいしょっ
だいこんをぬくのは ほんとに もう たいへん
たべられたくないから しがみついてるのかな?

(2014 年 12 月)

感じる力を育てたい

この世のすべてと出会うために、
美しいもの、未知なもの、神秘的なものに目を見はり、
発見の喜びに胸をときめかせるという子どもの感じるちからを、
じっくりと大切に育てたいです。

(2015 年 1 月)

思いを支える

たこを空に近づけたくて
トコトコ走る
せんせいもトコトコ走る
子どもに合わせてトコトコ走る
子どもの思いを両手で支えて 空に舞い上がる
どこまでも高く舞い上がる おなじ思いになって舞い上がる

(2015 年 2 月)

いっしょはあったかい

ともだちは あったかい
くつつくと もっと あったかい
ころも からだも あったかい
ひとりじゃないから うれしい
うれしいから えがおになれる
えがおは とっても あったかい

(2015 年 3 月)

気づきからすべてが始まる

気づかないと、見えません。
聞えませんが。
感じませんが。
それは、ないことと同じ。
気づきから、
世界のすべては始まり、動き出すのです。

(2015 年 5 月)

雨とひとつになりました

空から自由になった雨は、
妖精となった子どもたちに、うれしそうにまわりつきます。
いつのまにか、雨と子どもたちは、ひとつになって、
かぜいろのところで、お散歩にでかけます。
どこまでも、かろやかに、背中の翼をふるわせながら。

(2015 年 7 月)

感じることから 世界は広がります

人間にはいろいろな感情があります。
小さいときに、どれだけの感情に出会えるかで、
その人の世界は変わるのかもしれませんが、
いろいろな感情に出会えば、その数だけ世界は広がり、

感じることの大切さを知る大人が、そっと見守っていれば、
「いま」を楽しむ幸せを知ることができるのだと思います。

(2015 年 8 月)

子ども自身の肯定が 自分を未来に導く

子どもは、今のままの自分でいいとは思っていません。
それは今の自分を否定しているのではなく、
今の自分を肯定しているからこそ、
未来も肯定できて、大きな期待を持てるのです。
それが今の自分を超越しようとする原動力なのです。

(2015 年 10 月)

育てるのではなく 育ちを手伝う

子どもたちが、主体的に育つのを手伝うのが大人の役割です。education(教育)の原義は、子どもに潜在している可能性を外に向けて導き出すことだと言われています。大人の価値観を一方的に植え付けられることを、子どもたちは望んでいません。
なぜなら、誰も本来の自分を生きたいと思っているからです。

(2015 年 11 月)

あたりまえは ふしぎ

あたりまえのことがうれしい。
どこにでもある土が、野菜を育て。
その野菜が、子どもを育てる。
ふしぎだな？
野菜はなんにも言わないのに、
どうして、こんなにうれしいんだろう。
どうして、こんなにあったかいんだろう。

(2015 年 12 月)

他の人に共感できるのは人間だけ

地球上の約 70 億人の人間は、「一人の祖先から始まった」ことだけは現在解明されていると、生命科学の先端に携わる研究者は言っています。
そして重要なのは、「人間だけが他の人の立場に立てる」能力を有しているそうです。言い換えれば「共感」する能力のことです。
乳幼児期に大切に育てたいものは、他の人の立場に立てる人間関係において他にありません。

(2016 年 1 月)

うれしくて うれしくて

「はじめまして」から「さようなら」をいう日まで、人に与えられた時間には限りがあります。
それなら、うれしさに包まれながら生きてほしい。

できれば、そのうれしさを分かちあいながら過ごしてほしい。
みんながうれしさにあふれていれば、
きっと幸せにちがいない。
そんな時間を生きてほしい。

(2016 年 2 月)

遊びのなかですべてを吸収する

1 月には大雪が降り、
2 月には菜の花が咲く、
というとても豊かな季節の変化に関わる喜びを感じる子どもたち。
全身の感覚を研ぎ澄ませて、何でも遊びに変えてしまう。
その力のすごさがうれしい。

(2016 年 3 月)

こころのそだち

こころってなに？
こころは、どこにあるの？
こころはコロコロどこかにいっちゃうの？
おなかはへるけど、こころもへるの？
へったらいへん。
こころをいっぱいにしなきゃ。

(2016 年 4 月)

ちがうからおもしろい

みんなのおもいは ひとりひとりちがう
いつも おなじにしたがるけど
ちがうものは おなじにはならない
そのことをわすれて
みんなとおなじが いちばんといっている
ほんとはちがうから おもしろいのに

(2016 年 5 月)

関わるとは、相手の気持ちを想像すること

まわりのすべてと関わり合うことが、
いちばんうれしくて、
いちばんの学び。
子どもたちはそのことをよく知っているから、
毎日せっせと関わり合う。

(2016 年 6 月)

おとなから栄養を吸収する宿り木

おとなにからまって、たっぷりと栄養を吸収する宿り木のような、子どもたち。
安心も優しさも好奇心も元気も、
すべてを吸収されるから、大人も大変。
もう空っぽなんて言うてはいられない。
せつせと、心と知性の栄養を補給しなければ。

(2016 年 8 月)

出会ったことを大切にする

田んぼを舞台に生きる虫。
時を忘れて夢中で戯れる子ども。
生きるものどうしの、一回だけの出会いの瞬間。
この貴重な経験が、学びなのでしょう。

(2016 年 9 月)

ひとつになって

やわらかいひかりに さそわれて
はなを みずにとかしてみたら
はなとみずとひかりがひとつになって
すきとおる はないろのジュースになりました
すると いつのまにか
こころも はないろになりました

(2016 年 10 月)

あそんでくれるものを探す小さな瞳

小さな瞳は、世界をこころに映し出しながら、
いつも、あそんでくれるものを、探しています。
おそびたい思いで見つめるから、
見つめられたものは、うれしくなり、
小さなこころの中で踊りだします。
見つめるものと、見つめられたものが、こころを分かち合うとき、
幸せなあそびが始まります。

(2016 年 11 月)

あふれる思い

表現はあふれ出した思いです。
あふれ出したものが言葉になり、
かたちや点や線になり、
リズムや旋律になるのです。
思いがあふれ、外に出したくなるから、

人はその思いをつかって関わり出すのです。

(2017 年 1 月)

心は受け継がれるもの

人の命には限りがあり、
未来に生き続けることはできないけれど、
大切にしたい心をもって子どもに接することで、
それが子どもの心に流れ込み、
子どもの心に成り変わり、
心は未来に生き続けることができるのです。

(2017 年 2 月)

いまの心のありようを知ること

いま子どもが、何を経験しているのかを知ることが、
子育ての第一歩です。
それも目に見えない心の経験を知ることが大切です。
いまの心のありようを知り、
それに具体的な働きかけをすることが
子どもにとって一番の成長につながります。

(2017 年 3 月)

ふれあうと心があたたかくなる

生きることはふれあうこと
ふれあいから世界が広がり
ふれあうから関係が深くなる
ふれあいは心のハグ
ハグされるとあたたかくなる
心があたたかくなるとうれしいから
またふれあいたくなる

(2017 年 4 月)

子どもは主体的な学び手

不思議そうにながめる視線の先には
どんなイメージが展開されているのでしょうか。
子どもは学ぶ力と意欲を一定程度そなえた存在だから、
日々主体的に関わりながら学んでいます。
それにもかかわらず、能動的に学べない存在だと決めつけ、
すべてにおいて指導して、それに従わせることに違和感を覚えます。
大切なのは、主体的に関わろうとする子どもの姿勢から、
その子のもつ可能性を引き出すことです。

(2017 年 5 月)

一つひとつ確かめながら生きる

わかりきったことなどありはしない。
ほんとうは何もわかっていないから、
一つひとつ確かめながら生きている。
ていねいに考えれば考えるほど、
深くおもしろくなることだけはわかっているから、
じっくりと向き合ってみる。
そしたら、新しい気づきがうれしくなる。

(2017 年 6 月)

この子らのしあわせのために

子らの瞳に映るもの
それは どこまでも無垢で透き通る世界
ふかふかの光とつぶやく風につつまれて ゆめごち
おとなは ささやかな子守うたい
子らの思いを抱きしめる子守うたい
そのうたにゆられゆられて ゆめごち
あしたも しあわせでありますように

(2017 年 7 月)

いのちといのち

あたえられたときのなかで
ぐうぜん出会った いのちといのち
いのちといのちが かかわりあい
いのちといのちが 求めあう
つながりあうのが いのちといのち
うばいあうのも いのちといのちなのだと
名もなきいのちが ささやく

(2017 年 8 月)

ちがうのにおなじ

ちがう人どうしなのに
おなじことを想像して おなじことができる
なにもかもちがうのに
息をあわせて おなじことができる
ふしぎでうれしい瞬間

(2017 年 9 月)

めのまえのいまを ちゃんと生きる

からだと ところと あたまの

ぜんぶをつかって
めのまえの いまを かんじましょう
せかいじゅうを とびかう ゆびさきだけの
じょうほうに まどわされずに
めのまえの いまを いきましょう
ほんとうの じぶんに であうために

(2017 年 10 月)

せっせせっせとそだちあう

なけば よしよし なぐさめ
あるけば よちよち ついてゆく
わらえば いっしょに たのしくなり
おこれば しょんぼり かなしくなる
こどもは ふしぎなくらい ひびきあい
いまを せっせせっせと そだちあう

(2017 年 11 月)

ちきゅうの いのち

だれも ふりむかないのに さくはな
くさのはかげの だんごむし
つちにねむる みみず
ちいさな ちきゅうのなかに みちている
ひとつひとつの いのち
じっと みつめてごらんない
みんなじぶんにうまれたのが うれしくて
じぶんのいのちを いきています

(2017 年 12 月)

しあわせの伝言

いのちをつなぐことが たいせつなことを
知っているような 子どものしぐさ
そのやわらかい 瞳には
いのちをいつくしむ思いがあふれています
だれかに教えられたわけでもないのに
じぶんがされて うれしくてしあわせだから
おなじように伝言します

(2018 年 1 月)

めはおしゃべり

めは とてもおしゃべり
やさしくゆれる ゆりかごみたいに

いろいろな おもいが いったりきたり
だきしめることも みとめることも
なんでもできる
とてもふしぎで たいせつなそんざい

(2018 年 2 月)

いっしょにみつめた しあわせの日々

子どもたちが、かけだしていく 3 月。
ゆったりとじかんの流れたほいくえんで、
かけがえのないいのちを生きて、
いっしょにみつめた、しあわせのひび。
これからも目をこらし、耳をすまし、
あらゆるものに、こころをかたむけてください。

(2018 年 3 月)

あしたが待ち遠しかった日々

何もかもがあたたくて、底抜けにあかるくて、
すべての思いを受け止めてもらえた時代がありました。
あしたがうれしくて、待ち遠しくて、
胸の高鳴りを押さえきれない夜がありました。
風のささやきも、雨のうるおいも、
葉のしずくに映る小さな地球も、
すべてが微笑んでいた、子どもの時代がありました。

(2018 年 4 月)

とことんあそびつくせ

とことん あそべ
へとへとになるまで あそべ
ぐうぐうおながへるまで あそべ
うとうとねむくなるまで あそべ
なにがなんでも あそべ
あそびつくして
じぶんのせかいを みつけろ

(2018 年 5 月)

みんなで てんつくてん

てんてんつくてん てんつくてん
落ちるな雨空 てんつくてん
力をあわせて てんつくてん
そしたら いつのまにやら
笑い空 みんなつられて笑い顔

てんてんつくてん てんつくてん
雨もほしけりゃ 陽もほしい
てんてんつくてん てんつくてん

(2018 年 6 月)

子どもの世界を見守る

子どもの心で感じ、
子どもの頭で考え、
子どもの体で動く。
その一つひとつをじっくりと体験させることが、
生きる力や学ぶ意欲を育てます。
子どもの興味・関心を大切にしたい遊びが、
今は一番のお勉強なのです。

(2018 年 7 月)

心を自由にする

新聞紙を部屋中にまき散らす、
全身でどろんこ遊びをする、
服を着たまま水と戯れる、
いろいろな友だちと触れ合う、
すべての色を使って自由に描いてみる、
心を自由にして、いろいろな体験をさせることが大切です。
あれはダメ、これもダメばかりでは、
子どもの心・知・身は育ちません。

(2018 年 8 月)

あなたのころは みらいのあなた

目の前の風景は、あなたのころに映る風景だから、
みんなころが違うように、少しずつ違う風景を見ている。
それぞれのころのかたちで、風景の見え方は変わるのです。
ころのかたちで、人の見え方も変わり、
ころのかたちで、自分のかたちさえ変わります。
そんなころは みらいのあなたになっていくのです。
とても大切なころだから、じっくり育てたいと思います。

(2018 年 10 月)

しぜんからまなぶ

自然にふれると、なにか不思議な感じがします。
自然には同じものがなくて、
みんな違う豊かさに 喜びあっているようです。
子どもは、そんな自然が好きです。

ふれたくてしたがありません。
自然に包まれると、安心するのかわれしように、
毎日、からだとこころでふれあいながら学んでいます。

(2018 年 11 月)

「アルプスの少女ハイジ」が教えてくれること

子どもの成長に必要なのは、豊かな自然との触れ合い、愛情に包まれた環境、子ども自身が学びたいと思うような大人の教育の働きだということを、「アルプスの少女ハイジ」は教えてくれます。

クララのおばあさんは、ハイジに童話を途中まで読み聞かせ、その後の話が知りたければ、自分で文字を覚えなさいと伝えて温かく見守ります。

するとそれまで家庭教師が厳しくしつけ、教育しても、まったく覚えなかった文字を、自分からマスターしていきます。今から 140 年前ほどの児童文学です。

(2018 年 12 月)

こころころ こころころころ こころころ

こころは いつも ころがりながら
いろいろな こころと であい
あたらしい こころに なりつづけます

(2019 年 1 月)

いきるすがたに おなじはない

しぜんには おなじものはありません
みんなちがうから いきていけるのです
ひと おなじ
すがたかたちが ちがうのに
おもいが おなじでなければ おかしいなんて
なんと おかしなはなしでしょう
いきるすがたは みんなちがうからいいのです

(2019 年 2 月)

じぶんをいきる

じぶんの すきなことを
じぶんで かんがえて
じぶんで やってみる
じぶんの ゆめは
じぶんで かなえるもの
それが
じぶんを いきるということ

(2019 年 3 月)

未完成を楽しむ

完成した大人になろうと生き急いでみても、
そんな自分に会うことはありません。
そもそも完成した人間など存在しないからです。
現在進行形の未完成の状態をどう生きるかが重要で、
自分の生きる方向を見定めて、
ただひたすらに歩き続けることが大切だと思います。
子どもと一緒に未完成の姿を楽しんでみませんか。

(2019 年 4 月)

子どもと大人の折り合いが子育て

人は自分の思いで生きることを求めます。
しかし自分の思いだけでは生きてはいけないことも知っています。
人の数だけ思いがあるからです。その相互の思いがぶつかり合ったときに、人は傷つき、怒り、悲しむ
のです。
乳幼児期から、子どもは思いを受け止めてもらい、大人の思いもまた、伝えるというお互いの「折り合
い」の経験こそが大切で、その過程のことを「子育て」というのだと思います。

(2019 年 5 月)

愛されるから、愛せるようになる

愛される人は、自分を愛せるようになります。
自分を愛せるから、他の人も愛せるようになります。
自分を愛せることは、自分の存在を肯定するということです。
そんな人は、他の人のことも肯定できるのです。
それがコミュニケーションの始まりです。
最近の不寛容な社会文化的状況は、自分の望む姿で愛されてこなかった結果の現象だといえるのです。

(2019 年 6 月)

ふれあいのかずだけ ゆたかになれる

ひととふれあい むしとふれあい
どうぶつとふれあい しょくぶつとふれあい
いろいろな いのちと ふれあいながら
じぶんを たがやしていく
つちや みずや かぜにふれ ひかりをまといながら
ひとは ふれたもののかずだけ あいてをかんじ
ゆたかになっていくのです

(2019 年 7 月)

そのままの今を映し出す子どもたち

不思議なくらい、何もかもまねます。

まねることがおもしろいから、まねます。
つぎからつぎに、まね続けても、
あきることなどありません。
目の前のすべてを、いっぱいまねて、
疲れたら、ぐっすり寝ます。

(2019 年 8 月)

おもしろいからもっとやりたい

「ほめられるからやる」よりも、「おもしろいからやる」という気持ちを乳幼児期に育むことが大切です。
なぜなら、「おもしろいからやる」のは能動的な意志の表れで、主体的な意欲があるからです。
「おもしろいからもっとやりたい」という気持ちがあれば、頑張るという姿勢が生まれ、その姿勢を通して成功体験を積み上げ、「自信」という一連の心の力を身につけることができるのだと思います。

(2019 年 9 月)

「ある」を受け止めると、「なる」へ向かいます

季節のかぜと、
草花のやさしさと、
いつもあそんでくれる虫たちと、
それから、人のぬくもりは、
「ある」がままのあなたを、そのまま包み込んで、
やがて「なる」に向かうあなたへと導いてくれます。

(2019 年 10 月)

かかわることで 育ちます

毎日、新しいことと出会い、お友だちとの物語が続きます。
ふれあえば、何かがはじまり、知らなかった感情とも出会います。
人は人と交わることで、少しずつ育ち、周りのすべてとのかかわることで、豊かになれるのです。

(2019 年 11 月)

育ちたいと思う子どもであってほしい

大人ができることは、子どもの思いを受け止めて愛することだけです。
愛されて育った子どもは、それだけの価値があると思い、焦らずにじっくりと自分を信じて育ちます。
大人が比べて、効率的に教え込めば、自信のない、勝ち負けの価値観しか持てない人に育ってしまうのかもしれない。

(2019 年 12 月)

いつも新しいわたし

きょうのわたしは、きのうのわたしではない。
あしたのわたしも、きょうのわたしではない。

いつもわたしは、新しいわたし。
まだ見ぬわたしに会うために、
いまを生きることが 大切なのです。

(2020 年 1 月)

いきるために そだちあう

よろこびは かかわりあうから かんじます
きぼうは そだちあいから めばえます
しあわせは ふれあうから みつけられます
ひとは ささえあって いきています
いきるということは かかわりあうということなのです

(2020 年 2 月)

一人ひとりの物語を生きています

同じ時間の中で、みんな少しずつちがう世界を生きています。
一人ひとりの心で世界を見ているから、ちがってあたりまえ。
でもひとりぼっちで生きているわけではありません。
ひとは心を重ね合わせるよろこびを知っているから、
かたちのちがう心と心の交流を楽しんでいます。
幸せとは、そんなところから生まれるのでしょうか。

(2020 年 3 月)

ていねいな関わりから豊かな心は育つ

人は心をもって生きています。
その心は、人と人との心の交流から育ちます。
目の前の人との関係を通して学び育つのです。
だから人は人に育てられ、人となるといわれるのでしょうか。
ていねいな関わりから、豊かな心は育つから、人はまた豊かにつながりたいと思うようになるのです。

(2020 年 4 月)

やさしさは、やさしさから生まれます

やさしさは、やさしくされた時の感情から生まれます。
それは人から人へ伝えるうれしさの伝言です。
教えるものではなく、やさしくされた経験があればいいのです。

(2020 年 5 月)

ひとつになる

みずはまわりのものをうつしだし
ひとつになります。

こどもはまわりのひとをうつしだし
ひとつになろうとします。

(2020 年 6 月)

いつも何かが寄り添ってくれている

風が木の葉を揺らし、やさしく語りかけてくる。
この道をずっと歩いて行くと、見たこともない素敵な世界が待っている。
しゃぼん玉に誘われて、いつの間にか心は空を舞っている。
独りぼっちの暗い夜道を照らす月は、心の震えを癒やしてくれる。
何かに出会うたびに心が動くことを、生きているという。

(2020 年 7 月)

いとおしく思えるのは、 そのひとの人生と一緒に生きようとしたから

生きる時間は、思っているよりも、ずっと短い。
そのせいか、自分のことが大切で、ひとの思いさえ、自分に向けさせようとしています。
でもわかってほしい、自分の大切な時間を、そのひとのために使ったぶんだけ、いとおしく思えるということ。
ひとりではないから、しあわせなのです。

(2020 年 8 月)

周りのひとは、あなたの映し鏡

ひとは自分の言葉や表情または行動を自分では確認できません。
周りのひとの言葉や表情を借りて知ることができるのです。
周りのひとはあなたを映し出しているのです。
周りのひとに自分が映し出されているから、
それを映し鏡ともいいます。
あなたは唯一無二のあなたであるけれども、
あなたは周りのひとに映し出されて、はじめてあなたなのです。

(2020 年 9 月)

こどもの目線から見える世界

おとなの世界がある。
こどもの世界がある。
どちらも価値のある世界です。
正しさとか決まりごとはひとの数だけあるから、
ひとまず置いといて、
柔らかな発想と豊かな感性で、子どもの世界を見てみませんか。

(2020 年 10 月)

それぞれのいまをいきている

同じところで、同じあそびをしながら、同じ時間を過ごしていても、みんな違ういまを、生きています。
それぞれのこころの目で、世界を見ているからです。
同じだけど違う。違うけど同じ。
なんだか不思議で、おもしろいですね。

(2020 年 11 月)

自然とは「おのずからそうである」こと

子どもは自然と同じであるといわれます。
本来、自然(じねん)は「おのずからそうである」存在という意味を持ち、子どもも又同じ意味を持つ存在だからです。つまり、生まれたときから固有の命と資源を保有する存在であるということです。そんな自然と子どもだから、いきおい大人の都合で開発（教育）しようとするのがダメになってしまいます。本来持っている能力と性質を奪ってしまうからです。時間をかけて、その子だけが持つ可能性と一緒に探してみませんか。

(2020 年 12 月)

愛するとは認めること

かわいがることと、愛することは違います。
愛することは、ひとりの人間として認めることです。
幼いから、なにもできないわけではないのに、心配しすぎては、生きる力をうばってしまいます。
自分の子どもだから、自分のものとして関わられると、迷惑なときもあるのです。
子どもは 生きる力を信じてもらったときから、自分を生きはじめるのです。

(2021 年 1 月)

子どもが育てば、おとなも育つ

愛されることで、豊かな心が生まれる「乳児期」。
おとなのまねを始め、思いを伝えたいと思う「1 歳児」。
友だちのまねを始め、イヤイヤばかりの「2 歳児」。
友だちと遊びながら、まだまだ自分中心の「3 歳児」。
思いやりの心が育ち始める「4 歳児」。
意欲を持って挑戦できるようになる「5 歳児」。
子どもが育てば、おとなもいっしょに育つのが子育て。

(2021 年 2 月)

大切なのは うれしい思い

会ったときから、うれしくて、
あなたとの時間が、永遠に続けばいいと願った。

語り合いたい、ふれあいたい思いが、大きくふくらみ、
靴をはくのも、もどかしいほどでした。
なのに雪のように、はかなく消えてゆく時間。
いつか、保育園の生活も思い出に変わるけど、
あのときのうれしさは、こころのなかに、しまっておいてください。

(2021 年 3 月)

いまを遊びつくせ

ぽかぽか陽気に誘われて
気まぐれな風に心の翼をくすぐられると
空に触れたくなったのか
大地を蹴って羽ばたき
うれしさ沸き立つ笑い声で春とたわむれる
子らよ時を忘れていまを遊びつくせ

(2021 年 4 月)

自然と共に育ちあう

子どもの畑の甘くてやさしい味のいちご、
園庭の木から収穫できる真っ赤なさくらんぼ、
あすなる保育園はうれしい収穫の春を迎えています。
目の前の自然と関わることを大切にしながら、子どもたちは共育ちをしています。
便利さではなく、豊かさを感じることが、幸せにつながると思うからです。

(2021 年 5 月)

おもいをつなげる

おもいは みんなにあって
そのおもいは いろいろあるけれど
じぶんのおもいを たいせつにしたいから
あなたのおもいも たいせつにします
いろいろなおもいが であって
つながれば きっとしあわせだろうな

(2021 年 6 月)

何のために学ぶのですか？

誰よりも、何よりも優れた人になるために学ぶのですか？
その学びは、あなたを幸せにしますか？
人は限られた時間を、より自分らしく生きるために、
学ぶのではないのですか？
学びは、身近で具体的な体験から感じ、考えることから始まります。

(2021 年 7 月)

相手の気持ちを想像できる人に育ってほしい

相手の気持ちを想像できて受け止められる人は、
自分の気持ちも相手から受け止めてもらえる。
自分の気持ちだけが大切な人は、
いつまでたっても一人ぼっち。
生きるということは、関わり合うということなら、
お互いの気持ちを受け止め合うことは、
幸せに生きるということだと思います。

(2021 年 8 月)

子どもの未来のために

排他的な思想や神に縛られたり、
自分の力、富にこだわり過ぎると、心が貧しくなるような気がします。
貧乏な人とは、物やお金がない人ではなくて、
いくらあっても満足しない人のことを言うのだそうです。
古今東西の賢者は、それぞれの言葉で同じことを繰り返し教えてくれます。

(2021 年 9 月)

一人として同じ子はいないのだから

その子がその子として生きていることを支えるのが子育てです。
そのためには常に並んで「ともに生き」ながら、
その関わりの中で子どもを理解することが欠かせません。
みんなと同じようにという考え方で子どもを育てようとする、
その子はその子として生きることが難しくなり、
悩み苦しむことにつながるのです。

(2021 年 10 月)

おとなの都合は後回し

子どもがいちばん悲しいのは、
親の感情のままに育てられることです。
子どもがいちばんうれしいのは、
親が子どもの思いを受け止めてくれることです。
どちらも目には見えないけれど、
見えない心の動きだからこそ、大切にすることから子育ては始まります。

(2021 年 11 月)

そっと ささえていて

わたしが いまを いきているのは
あなたの ところが わたしを ささえてくれるから
すこしの ことばと あなたの ぬくもりがあれば

わたしは いまの しあわせに きづくことができる
そっと みまもりながら ささえてほしい
わたしの いきるすがたを

(2021 年 12 月)

ひとの数だけ 正しさが 있습니다

ひとは、みんな自分が正しいと思っています。
そう思うことで、自分を保てるしくみになっているのです。
そうすると、自分の正しさは、他人の正しさとぶつかります。
正しさを守ろうとするから、この世はとても生きづらいのです。
でも、少しためらいがちでもいいから、互いを想像できれば、
子どもたちの未来は、変わってくるのかもしれない。

(2022 年 1 月)

求めるものは 目の前にあります

ひとが求めるものは、すでに目の前にあります。
でも「ここだよ」と教えてはくれません。
感じることで その存在を知ることができるのです。
さらに学ぶことで、そこにあったことに気づくのです。

(2022 年 2 月)

子どもの未来は おとなしだい

子どもは、わがままに生きていたいわけではありません。
周りの世界を、手探りで確かめているのです。
いつも 一生懸命に確かめているのです。
こころを叩かれるために 生きているわけではありません。
おとなの言葉や態度から世界を学び、
自分の生きる未来をつくっているのです。

(2022 年 3 月)

みんなが しあわせでありますように

雲は淡くとけながら、ゆったり流れています
空は ぼんやり やさしく包み込んでくれます
風は こころを 静かに 揺すってくれます
土は ぽかぽか あたたかく
もぐらが もこもこ 動きだします
春が 笑うと うれしくて こころが 踊りだします
子どもたちも みんな 笑っています

(2022 年 4 月)

同じものは なにもない

人間は 同じものをつくろうとしてきました
だから少しでも違うものは だめなものだと きめつけてきました
自然も 人間も 同じものにしようとして
がんばってきたから 壊れてしまいました
自分は 他の誰でもないことを 知っているのに

(2022 年 5 月)

子どもに学ぶ

ひとは わからなくなると 笑う
ひとは こわくなると 怒る
ひとは 謝らせて 満足する
ひとは 上に立つことが うれしいらしい
ひとは こんなにちっぽけな ものなのですか
子どもは 豊かな思いをもち 育ち合っている
まるで ひとのありようを 教えてくれているみたいに

(2022 年 6 月)

一度きりのしあわせ

子どもは しあわせを運ぶ天使
こころを 喜びで 震わせ
ひとひらの命を 燃やす
子どもは しあわせを運ぶ 一陣の風
思いを うれしく誘い
ときめく ときを くれる
子どもは 一度きりのしあわせそのもの

(2022 年 7 月)

数え切れない思い

整理することが 好きな人間は
笑いも 悲しみも 怒りも 辛さも
ぜんぶ きれいに整理して
その思いが わかったような気になっています
でもみんな なんとなく気づいています
どれも 自分にはあてはまらないということを…
ひとの数だけ 思いのかたちはあるのです

(2022 年 8 月)

認めあいながら、生きる

ひとは 生まれたときから そのひとです

そのひととして 生きていれば それでいいのです
ほかのひとになる 必要もなければ 「なれ」と 命令されることもない
わたしを生きるために あなたを生きるために
認め合いながら 生きるのです

(2022 年 9 月)

夢中になって 楽しむ

夢中になって 瞬間を楽しむ 子どもたちは
いまを まっしぐらに 走り続けている
まだこない 先のことなど おかまいなし
ただ 一生懸命に 生きていれば
必ず 自分の未来は やって来る
学ぶ力も 生きる力も もって生まれてきたのだから

(2022 年 10 月)

どこへ おでかけ？

ベンチを 電車に見立て しゅば〜つ！
みんなで おでかけ どこに行くの？
海に行くの！ 山に行くの！ 公園に行くの！
それから どうするの？
みんなで なかよく あそぶの！
うれしさ いっぱい乗せて いってらっしゃーい

(2022 年 11 月)

いちばん しあわせな 時間

子どもの時間を ちゃんと 過ごしましょう
急がず あわてず ゆっくりと
子どもの時間を あそびましょう
言葉を 知る前に 丸ごと 感じましょう
感じたあとに 言葉は 豊かに 花を咲かせます
子どもの時間を ぜんぶ つかって しあわせになりましょう

(2022 年 12 月)

いのちは 流れるもの

立ち止まることなく 命は流れ続ける
137 億年の 宇宙も
46 億年の 地球も
20 万年の 新人類も
流れ続けて 今がある
その流れるプロセスのことを いのちという

(2023 年 1 月)

いのちの居場所

ひとは こころの居場所を求めて 生きている
ほかのひとのこころと 違うことに驚いて
迷子になり さまよいながら
それでも こころの乾きを潤すために 生きている
こころの居場所は いのちの居場所

(2023 年 2 月)

子どもの姿は おとなの姿

世の中の姿は 自分の姿
自分の姿は こころの姿
こころの姿は 生きてきた姿
生きてきた姿は おとなの姿
おとなの姿は 子どもの姿
まわりまわって 映し出されるのは 自分の姿

(2023 年 3 月)

いちばん しあわせなとき

安心できるひとのそばで
うれしさの感情に 満たされながら
豊かな時間を 過ごすとき
子どもは しあわせの ただなかにいる
わたしたちが しあわせな風景の
一部になれば 子どもは育つのかもしれない

(2023 年 4 月)

思いきり 生きる

あそべるときは まっしぐらに あそびつくす
知りたいときは とことん 追究する
感じたいときは こころを解放する
泣きたいときは わあーわあー 叫ぶ
悔しいときは 地球を 蹴飛ばす
うれしいときは 腹の底から 笑いつくす

(2023 年 5 月)

ひとは 変わり続けている

自分を 探しても 見つかりません
なぜなら ひとは 変わり続けているからです
変わり続けることを 生きるといいます
新しい自分に 出会うことを 喜ぶさきに

あなたの 未来はあります

(2023 年 6 月)

雨と いっしょに お絵描き

子どもの 思いのさきに 絵が生まれ
それに誘われ 雨も しとしと お手伝い
みるみる 楽しく 交わり
胸が そわそわ 騒ぎはじめる
みんなで あそべば いつまでも 夢のなか

(2023 年 7 月)

ひとりでは しあわせにはなれない

自分だけ 良ければいい
ひとを だましてでも 自分が 楽しければいい
自分だけが 正しくて 笑って過ごせればいい
子どもたちは そう思う先に
しあわせなど ないことを知っています
なぜなら ひとを愛することが しあわせなのだから

(2023 年 8 月)

手のひらは おしゃべり

子どもの 手のひらは おしゃべりです
手をつないでいると いっぱい おしゃべりします
黙っていても 手のひらは しゃべりつづけます
ところが ふくらんでいるときも しぼんでいるときも
てのひらが 教えてくれます
手をつないだら こころは ひとつになれるのです

(2023 年 9 月)

わたしは 誰でもない わたし

もう ○さいなんだから もう少し がんばろう
みんなは できるんだから あなたも がんばって
できる子は すごい子
ききわけのいい子は 良い子
みんな 発達のめやすを 目的だと 勘違い
めやすは 平均値
本当の目的は その子らしく 生きること

(2023 年 10 月)

こころはひととひととの間で つくられる

黙っていても
こころのなかには いつも おしゃべり
そっと耳を澄ますと 聞こえてきます
わたしは ここにいるんだよ と
ちゃんと 見て きいて それから うけとめて
しっかりと 応えてほしいのです
その繰り返しで 子どものこころを つくります

(2023 年 11 月)

ふれあい 表現して あそぶ

ひとは 表現することを 生きるということ
生きるとは 置かれたところで ふれあうということ
その ふれあいから あそびが はじまる
あそびは 自分の時間を
自分らしく 生きるということ
一度しかない 限られた時間のなかで
自分を 生きることが 生きる目的
子どもの 生きる姿を 見守るのが おとなの役割

(2023 年 12 月)

思いよ 風に乗って 届け

紙飛行機に 思いを乗せて
大切なあなたに 届けたい
あなたと こころを重ね合いたいから
いまを咲きつくす 花のように
精一杯 思いを届けます

(2024 年 1 月)

いっしょにいるだけで うれしい

やさしい匂いのする 先生や
やわらかな笑顔の お友だちと
いっしょにいと うれしくなる
保育園は そんな幼子のこころを
あたたかく包み込む 陽だまりの場所
みんなのなかにある しあわせの種よ 大きく育て

(2024 年 2 月)

少しずつ こころはふくらんでいきます

こころが ふくらむことを 育ちといいます
じつくりと 時間をかけて ふくらんでいきます

ときには しぼんだりして
まっすぐには 育たないときもあるけど
少しずつ うれしさを栄養にしながら
こころは ふくらんでいきます

(2024 年 3 月)

ほいく えん時代は 春の季節

幼いころに 咲く花は
やわらかく やさしく あまい 香りの宝物
いつまでも こころのなかを あたため続ける炎
この世に咲いた 一度きりの命だから
いっしょに ふれあいながら あそびましょ
幼い命は 春のなかで 育つのです

(2024 年 4 月)

すべての はじまり

思いのままに
無心になって 打ち込むことを
あそびといいます
そこから 生きるための すべてのが はじまります
その こころの動きを 受け止め 支えるのが
おとなの 役割

(2024 年 5 月)

ぬくもりのなかで 育つ

ひとの ぬくもりのなかは 安心だから
信じることを覚え こころを預ける
そのとき こころとこころは 愛し合い
支え 学び合いながら かたちづくられる
ひとの ぬくもりがあるから
ひととして 育つのです

(2024 年 6 月)

ゆっくりと 豊かに育て

子育てに 近道はありません
無駄なことを いっぱいしながら 育ちます
早い時期に 肥料をたくさんやっても
米は 大きく育たないのと 同じ
適切な刺激と ゆったり流れる時間と
肌をとおした経験が 育てるのです

(2024 年 7 月)

うれしさから はじまる

こころが うれしさに震えるとき
瞳は きらめき
手のひらは 風をつかみ
足は 大地を踏みしめる
うれしさで 体中がが 目覚め
そこから 未来への歩きが はじまる

(2024 年 8 月)

こころの色が空に舞う

一人ひとりの こころは違うから
みんなの気持ちを 色にして
空に 浮かべてみる
すると 不思議なメロディーが流れ
やがてそのメロディーに うながされるように
子どもたちは 宙に舞いはじめる

(2024 年 9 月)

それぞれの物語

同じときを 生きていき
同じことを していても
こころの姿が 違うように
同じことを 感じてはいない
それぞれの 物語のなかで
違う思いを持って 生きている

(2024 年 10 月)

あそびは 学び

子どもは あそぶために 生まれてきました
あそぶことで 世界が 広がり
あそびに 夢中になることで
こころも あたまも からだも 育ちます
その姿を 丸ごと愛して
見守ることで 学びがはじまるのです

(2024 年 11 月)

生きることは 支え合うこと

ひとは ひとりでは 生きていけません
支え合うから 生きていける生き物です
ひとりひとり 違うということを 知っているから

認め合い 助け合うことが できるのです
ひとのこころを 大切にしたいと思うから
自分のこころも 大切にされるのです

(2024 年 12 月)

ふれあう うれしさ

なにかと ふれあうとき
こころが ざわめく
皮膚や 目や 耳を とおして
なにかが 静かに 染みこんできて
こころを 揺さぶりはじめる
そして なにかが はじまる

(2025 年 1 月)

自然のなかで育つ

自然と 戯れる 子どもたち
不思議な色 かたち 手ざわり 匂い
そのすべてを からだに取り入れ
あたまと こころを 耕していく
地球と結ばれて ひとになれるのは
空と 大地と 海から 生まれたから

(2025 年 2 月)

はじめてのことばかり

はじめての 出会いは うれしい
こころが そわそわ ざわついて
じっと してられない
湧き上がる うれしさで
こころの窓が 開き
世界の すべてが 飛び込んでくる

(2025 年 3 月)

園長からのメッセージ

2000年4月～2025年3月

著 者 福重陽一

発行者 社会福祉法人清心福祉会 幼保連携型認定こども園
あすなろこども園

〒892-0877 鹿児島市吉野二丁目44番29号

TEL.099(243)8973 FAX.099(243)8059

E-mail asunarochoiku@muse.ocn.ne.jp

発 行 2025年3月1日



ASUNARO

社会福祉法人 清心福祉会 幼保連携型認定こども園

あすなろこども園

〒892-0877 鹿児島市吉野2丁目44番29号
TEL.099(243)8973 FAX.(243)8059
e-mail asunarochoiku@musu.ocn.ne.jp

